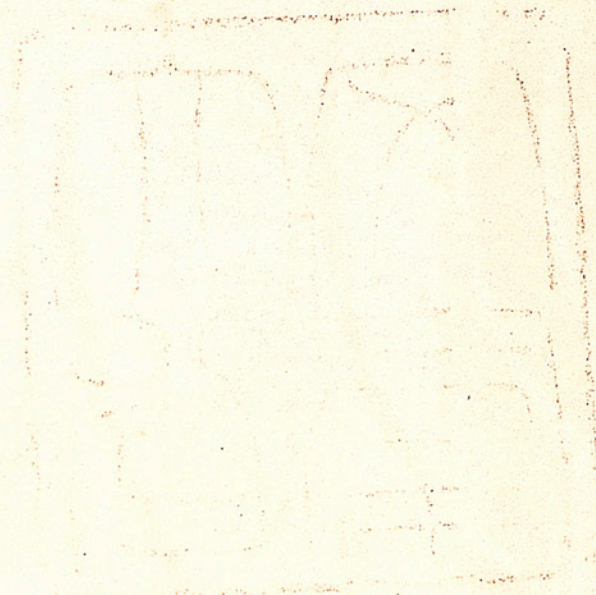




民國十一年十二月二十二日星期三
三編
御覽
可
明治四十二年一月一日發行
每月一冊
一冊

求道

第六卷
第一號



求道第六卷第壹號目次

求道

◎信

自督

◎底下の凡愚

◎慈光の照曜

講話

◎三寶紹隆

告白

◎佛の強縁

聖傳

◎チャータカ釋尊傳

第九バンヤン鹿

◎十七憲法

序論

敷咏

◎夜の歌(長詩)

時報

◎昨年の恩寵◎昨年の地方傳道

講

話

求道學舎

(本郷森川町一番地)

第二 求道會

(九段坂佛教俱樂部)

第三 求道會

(日本橋蠟燭町説教所)

求道

第六卷 第壹號

信

生死之家以疑爲所止
涅槃之域以信爲能入

人生をして無明の世界に終らしむるか、人生をして光明の世界に終らしむるかは、信を得ると否とにあり、信は人生に於て如來の慈父慈母ましますことを認むる也、信なきものは畢竟此慈悲の親を疑ふもの也、疑ふものは如何にするも人生に光明を認むるあたはず、遂に人生をして荒涼たる沙漠に彷徨するの想あらしむ、既に沙漠に在り、如何にするも一點の希望をも認むるあたはざる也、善導大師諭へて曰く無人空過の澤に在るが如しと、而して昏に空漠にして親友善知識に遇はざるのみならず、貪瞋煩惱の水火、前に横はり、群賊惡獸の惡業後に迫り来る、進まんか進むに處なく、退かんか退くに處なし、是所謂返へるも亦死せん、住すとも亦死せん、往

くとも亦死せん、一種として死を免れずといふもの、人生何の處にか其身を置く所かあらん、近時人生に煩悶する人の如きは實に此無明界に迷へるものなり、而して如來大慈父は此人生空過の沙漠に迷へる我等を召喚したまふ也、「汝一心正念にして直に來たれ我能く汝を護らん」とは實にこれ大悲本願の聲にあらずや、嗚呼世の行路に惱めるの人よ、荒涼たる世界に彷徨せる人よ、善友善知識に遇はざる人よ、乾燥なる學問、冷かなる理論に迷はる人よ、貪欲に溺るものよ、瞋恚に焼かるものよ、外界の物欲に誘はるものよ、惡業煩惱に苦じめらるものよ、常に此慈父召喚の聲に聴け、すべて水火の二河に墮せんことを恐れざれ」と、嗚呼此慈光我を照護まします、我通れんとするも得べからず、無明長夜の燈炬なり、智眼くらしとかなしむな、生死大海の船後なり、罪障ももしとなげかされ、智眼暗ければこそ如來は燈炬としてあらはれたまふ、罪障重ければこそ、如來は弘誓の船を浮べたまふ、願力無窮にまします、罪業深重ももからず、佛智無邊にまします、散亂放逸もすてられず、我等水火貪瞋煩惱の中に如來清淨願心の白道を辿り、決定して疑怯退心を生ぜざるものは金剛不壞の信心に非ずや。

既○如○來○大○悲○の○聲○を○聞○く、人○生○既○に○大○慈○の○親○の○在○し○ま○す○を
 認○め○た○り。釋○尊○一○代○の○説○教○は○東○岸○上○に○人○の○勸○む○る○聲○也、如○來○
 の○本○願○は○西○岸○上○に○呼○ぶ○の○聲○也。釋○迦○彌○陀○は○慈○悲○の○父○母、種○々
 に○善○巧○方○便○し、わ○れ○ら○か○無○上○の○信○心○を、發○起○せ○し○め○た○ま○ひ○け
 り。吾○人○何○等○の○幸○か○人○生○佛○陀○の○教○に○遇○ひ○た○て○ま○つ○り、殊○に○末
 代○五○濁○の○凡○愚○如○來○の○悲○願○を○聞○き○た○て○ま○つ○る○を○得○た○り、釋○尊○説
 教○四○十○年、當○に○涅○槃○に○入○り○た○ま○は○ん○と○す○る○や、王○舍○城○の○悲○劇、
 韋○提○希○夫○人○の○幽○閉○起○る、是○洵○に○人○生○險○惡○の○行○路○正○に○凡○愚○底○下
 の○罪○人○を○救○濟○す○る○の○出○來○事○に○非○ず○や、是○皆○大○聖○矜○哀○の○善○巧○な
 る○者、此○時○に○當○り○て○釋○尊○本○願○説○調○の○妙○味○を○説○き○て○極○惡○最○下○の
 衆○生○を○導○き○た○ま○ふ、是○大○聖○出○世○の○本○意○に○し○て○や○が○て○是○れ○我○等
 濁○惡○不○善○の○輩○に○與○へ○た○ま○ふ○發○遣○の○御○教○に○非○ず○や、今○世○人○生○に
 苦○め○る○の○人○は○王○舍○城○の○悲○劇○の○再○演○に○非○ず○や、阿○闍○世○王○の○煩○悶
 悔○悟○に○非○ず○や、韋○提○幽○閉○の○求○道○に○非○ず○や、正○に○こ○れ○彌○陀○の○本
 願、釋○尊○の○説○教○を○き○く○べ○き○の○時○機○熟○せ○る○者○と○謂○つ○べし、「彌○陀
 の○本○願○ま○こ○と○に○お○は○し○ま○さ○は○釋○尊○の○説○教○虛○言○な○る○べ○か○ら○ず、
 佛○説○ま○こ○と○に○お○は○し○ま○せ○ば○善○導○の○御○釋○虛○言○し○給○ふ○べ○か○ら○ず、
 善○導○の○御○釋○ま○こ○と○な○ら○ば○法○然○の○お○ほ○せ○そ○ら○ご○と○な○ら○ん○や、法

無○明○の○大○夜○之○が○爲○に○光○明○の○世○界○と○な○り、生○死○の○苦○海○之○が○爲○に
 涅○槃○の○彼○岸○を○認○む○る○を○得○た○り、嗚○呼○信○仰○は○人○生○を○し○て○意○義○あ
 ら○し○む○る○生○命○也、信○仰○は○人○生○を○し○て○調○和○せ○し○む○る○中○心○也、信○仰
 は○人○生○を○し○て○根○抵○あ○ら○し○む○る○地○盤○也、世○の○苦○め○る○人○よ、惱○め
 る○人○よ、世○の○生○活○奮○闘○す○る○人○よ、世○の○罪○惡○に○悶○へ○る○人○よ、
 世○の○理○論○難○行○に○疲○れ○た○る○の○人○よ、速○か○に○此○大○慈○悲○の○聲○を○聞○け、
 從○來○の○あ○ら○ゆ○る○苦○惱○行○路○皆○我○等○を○し○て○遂○に○此○親○を○知○ら○し○む○る
 過○程○た○り○し○を○知○り○て○人○生○の○意○義○明○ら○か○な○ら○ん、世○の○貪○欲○に○溺
 る○も○の、瞋○恚○に○燒○か○る○も○の、初○め○て○此○大○慈○悲○の○聲○を○仰○ぎ○て○忽
 ち○に○水○火○の○二○河○を○顧○み○ず、い○か○に○其○火○燄○熾○ん○な○る○も○其○波○浪○激
 し○き○も○遂○に○慈○親○の○恵○に○歸○り○來○る○時○人○生○を○調○和○す○る○統○一○の○中○心
 を○發○見○せ○ん、か○く○人○生○百○年○悠○々○と○し○て○如○來○大○慈○悲○の○聲○を○仰○ぎ、
 念○々○遺○る○こ○と○な○く○遂○に○涅○槃○の○彼○岸○に○趣○き○極○樂○無○爲○の○寶○國○に
 到○り○て○親○しく○慈○親○親○友○に○見○ゆる○を○樂○む○と○きは、人○生○の○歸○趣○明
 ら○か○に○し○て○前○途○希○望○の○光○明○赫○燦○た○る○を○期○せ○ん、か○く、曠○劫○已○來
 無○明○迷○妄○の○世○界○た○り○し○人○生○は○今○や○忽○ち○に○光○明○平○和○の○家○庭○を○實
 現○し○來○る、我○等○何○等○の○幸○か○二○尊○父○母○の○膝○下○に○團○欒○し○て○直○接○の
 靈○勸○を○き○く、愚○禿○鈔○に○曰○く「西○岸○上○に○人○あ○り○て○喚○て○言○く○と○は
 阿○彌○陀○如○來○の○誓○願○也、汝○の○言○は○行○者○也、斯○れ○即○ち○必○定○の○菩○薩

然○の○お○ほ○せ○ま○こ○と○な○ら○ば○親○戀○が○ま○う○す○む○ね○ま○た○も○て○空○し○か○る
 べ○か○ら○ず○さ○ふ○ら○ふ○か」と○嗚○呼○吾○人○は○親○戀○聖○人○の○化○導○に○よ○り○て
 慈○父○慈○母○二○尊○の○眞○意○を○聞○く、吾○人○は○今○二○尊○の○意○に○信○順○し○て○水
 火○の○二○河○を○顧○み○ず、念○々○遺○る○こ○と○な○く、彼○願○力○の○道○に○乗○ず○る
 を○得○た○り、是○れ○吾○人○が○現○時○の○信○仰○生○活○に○非○ず○や、嗚○呼○吾○人○胸
 中○の○白○道○は○僅○か○に○こ○れ○四○五○寸、洵○に○こ○れ○四○大○五○陰○の○有○漏○の○穢
 身○は○か○は○ら○ね○と、心○は○淨○土○に○棲○み○遊○ぶ、し○か○も○瞋○恚○の○火○燄○來
 り○て○道○を○燒○き、貪○愛○の○波○浪○來○り○て○道○を○濕○す、思○ふ○勿○れ○信○仰○を
 得○れ○ば○煩○惱○起○る○と○な○し○と、吾○人○人○生○に○在○ら○ん○限○り○は○煩○惱○を○斷
 ず○べ○か○ら○ず、煩○惱○を○斷○ぜ○ず○し○て○涅○槃○を○得○る○所○以○の○も○の○唯○如○來
 回○向○の○一○念○喜○愛○心○の○開○發○す○れ○ば○也、愛○心○常○に○起○て○善○心○を○汚
 し、瞋○憎○の○心○常○に○功○徳○の○法○財○を○燒○く、然○れ○ど○も○其○間○金○剛○不○壞
 の○白○道○は○人○壽○百○歲○念○々○斷○滅○す○る○こ○と○な○し、實○に○是○れ○人○生○を○貫
 く○無○碍○の○一○道○也、人○生○を○意○義○あ○ら○し○む○る○無○上○涅○槃○の○大○道○也、

三

噫○二○河○白○道○の○譬○喩○は、吾○人○が○内○心○の○實○験○也、王○舍○城○の○悲○劇
 は○吾○人○が○人○生○の○實○境○也、而○し○て○二○尊○の○發○遣○召○喚○は○親○しく○吾○人
 が○人○生○の○上○に○下○し○た○ま○ふ○大○慈○父○大○慈○母○の○御○聲○也、吾○人○は○其○御
 聲○を○聞○き○て○信○樂○開○發○す○る○の○一○念○如○來○最○愛○の○眞○の○佛○子○と○な○る、

と○名○く、龍○樹○大○士○の○十○住○毘○婆○沙○論○に○曰○く、即○時○入○必○定○と、曇○鸞
 菩○薩○の○論○に○曰○く入○正○定○之○數○と、善○導○和○尚○は○希○有○人○也、最○勝○人
 也、妙○好○人○也、好○人○也、上○々○人○也、眞○佛○弟○子○也○と○言○へ○り」と、嗚○呼
 是○れ○吾○人○極○惡○深○重○の○衆○生○が○聖○尊○の○重○愛○を○獲○る○も○の○に○非○ず○や、
 噫○四○海○兄○弟○の○眞○意○義○は○畢○竟○此○大○慈○父○大○慈○母○の○下○に○同○一○念○佛○す
 る○の○一○道○よ○り○實○現○し○來○る、行○卷○に○曰○く「十○方○群○生○海○此○行○信○に
 歸○命○す○れ○ば○攝○取○し○て○捨○て○た○ま○は○ず○故○に○阿○彌○陀○と○名○け○奉○る」と、
 嗚○呼○十○方○微○塵○世○界○の○群○生、同○一○念○佛○の○人○と○し○て○大○慈○父○の○御○名
 を○呼○び○つゝ、大○慈○母○光○明○の○懷○に○攝○取○せ○ら○れ○ぬ○れ○は、遂○に○如○來
 の○報○土○に○往○生○し○て○其○の○膝○下○に○待○ら○ず○ん○ば○あ○ら○ず、是○光○明○名○號
 内○外○因○縁○の○意○味○た○ら○ず○ん○ば○あ○ら○ず、愚○禿○鈔○に○曰○く「眞○實○の○淨
 信○は○内○因○な○り、攝○取○不○捨○は○外○縁○な○り、本○願○を○信○受○す○る○は○前○念
 命○終○な○り、即○得○往○生○は○後○念○即○生○な○り、他○力○の○金○剛○心○也、と○知
 る○べし、便○ち○彌○勒○菩○薩○に○同○し」と、是○洵○に○如○來○の○慈○父○慈○母○に
 遇○ひ○た○て○ま○つ○り○て○本○願○召○喚○の○聲○を○聞○く○の○一○念、前○念○命○終、後
 念○即○生、此○に○光○明○の○新○生○涯○に○入○り、金○剛○不○壞○の○信○を○懷○き○て、
 必○定○の○菩○薩○眞○の○佛○子○の○人○生○を○實○現○し○て、能○く○之○を○莊○嚴○し○終○に
 如○來○常○住○の○涅○槃○城○に○入○ら○し○め○た○ま○ふ。於○戲。

底下の凡愚

○私は實に底下の凡愚である、此頃熟々自己を顧みるに聖人が底下の凡愚と仰せられた御言が如何にも我身にふさはしく難有い。

○さて情考へみれば、多少書物を讀まぬでもなく、理窟を知らぬでもなく、世界の事も幾分は見聞せぬでもないが、色々經來りし結果を見るに、一として益に立つものは何も無い、加之十年已來教界に於て幾多の言論を爲し、實行を期したることも少くはない、勿論信念上より割出したることなれば確信は少しも變はらぬが、自分自身としては、はや何の益にもたぬ人間である。

○信仰の問題は實に根本の生命である、この様なものが、何の幸か佛の御慈悲を知らして、いたゞくことの出來たは實に無上の幸福であるが、さりながら其信仰を我物顔にしたがる我身はよく／＼の底下の凡愚である。

る次第である、

○人間は自分の心だけしか了解出來ぬものである、愚禿といふ謙遜の御言であるといへば、世間なみ／＼の卑下の意味としか了解せぬ、卑下には違ひなけれども、御自身がいかにも自身は愚なり禿なりとの御自感のいかばかり深かつたことであろうと推したてまつる次第である。

○さて／＼五年間の流罪終りて御自身を御覽なれば、いかにも愚禿親戀として殘されたばかりであるとの御思召でもあろう、流罪已後愚禿親戀とかいしめたまふとある、流罪中既に業に其事を御感じなされたのが、いよく／＼流罪終りて心中何の滞る限なく、勅免の御請にまで御書さなされたのであらう。

○久々の御流罪も終り、先師法然上人も御歸洛なされたれば、京都に御歸りなりてつもる話をもなし、久しぶりて御教化を承らんと御急ぎの道中、正月二十五日御往生遊ばされたとの事を承はられて、もはや歸りても何かはせんと思召して東國に御止りなされた、當時の御身はいかに斷筋の御思にておはしたてあろう、そして天地の間芒鞋竹杖愚禿親戀としていかにも御身の輕いことであらう。

○『正法の時機』とあもへども、底下の凡愚となれる身は、清

○孔子は四十にして惑はずといひ、孟子は我四十にして心を動かさずと言はれたが私は今年四十にして唯底下の凡愚として殘された。

○フアウストが述懐して噫我は哲學も法學も醫學もあややく神學まで非常に勉強したが、今一の憐むへき馬鹿として立つ、先生と呼ばれ、ドクトルと呼ばれ、十年來學生を引廻したが、今ははや何にも分からぬことが知れたと云ふたも實に味ある言である。

○こは文學上の話なれど、信仰上の感想は猶一層切なるものがある、されど世上一般の感想は感慨に過ぎないが、信仰上で自分の價値なきことを知らして、貴ぶ程身の輕ろ／＼として嬉しいことはない、凡愚が凡愚であるといふことが知らして貴へたといふことは難有ことである。

○今にして親戀聖人が愚禿と名のりたまひし御思召の幾分を仰ぎたてまつることが出来る、しかも五年間の御流罪中に之を名のりたまひしも偶然ではない、僧儀を改めて俗名を賜ふ、然れば既に僧に非ず、俗に非ず、是故に禿の字を以て姓とすと仰せられてある、特に流罪御差免の時愚禿として奏聞せられた時は、よく／＼御自身の御感想の深かつたこと、伺ひ奉

淨眞實のこゝろなし、發菩提心いかゞせん。自力聖道の菩提心、こゝろもことばもあよばれず、常没流轉の凡愚は、いかてか發起せしむべき。『聖人が底下の凡愚と自覺したまひて、我等を導きたまひし御恩を今更の如く難有感ずる。』

○略文類に『然るに薄地の凡夫、底下の群生淨信獲がたく、極果證しがたし、何を以ての故に、往相の廻向によらざるが故に、疑網に纏縛せらるゝが故に』とある、薄地底下の凡愚は如來の廻向なかりせば何とも爲て見ようがないのである、徒に疑の網に纏はれて動くことが出來ぬのである。

○しかるに此の如き凡愚が清淨眞實の信心を獲ることが出來たのは全く如來の御力である、そこで次の文に『乃し如來の加威力に由るが故に、博く大悲廣慧の力に因るが故に、清淨眞實の信心を獲る』とある、實に此の如き凡愚が信心を獲らるゝといふはよく／＼如來大悲の威神力を加へたまへばこそである。

○抑々此大悲を我等にしらせんとて佛は如何に御心を勞したまひたことであらう、聖人は又和讃に、『大聖の／＼もろとも、凡愚底下のつみひとを、逆惡もらぬ誓願に、方便引入せしめけり。』嗚呼人生の出來事は皆此凡愚底下の私を大悲の

○どなたの告白にも御縁のあるかぎり私は私が御話申したことが書いてあるが、事實にそれに違ひないが、是ばかりはいかな名利の心でも、とても自分の力といふことは毫厘もない。○ない筈である、現に其力が我にあるかとふりかへるときは我には何もないのである、何もないものがかかり、そめにも一點の私を加ふることは出来ぬ。

○光線の反射で光りてある鐵の様なもので、夫自身はいつぶりかへつてみても黒金である。

○我等はいつぶりかへつて見ても罪の塊の外はない。

○しかるに難有いことには亦いつても慈光の日輪は照して、下さる。

○慈光を離れて居るといふは日光の雲霧に蔽はれてある時である、されど雲霧の下明らかにして闇なきごとくである、どんよりして居るが、たしかである、親の懐に抱かれながら泣き止まぬ小供の様である、泣きだしたときには泣き止みたいと思ふても止めぬ様なもので、喜びたいと企ても喜べぬ。

○しかし親様はいつの間にか向ふから照して下さる、『慈光はるかにかふらしめ、ひかりのいたるところには、法喜をうとそへのたまふ、大安慰を歸命せよ。』

を憐みたまふ御慈悲が難有い。

○『あさなをもし、奉公をもし、獵すなどりをせよ、かゝるあさなをもし、罪業にのみ朝夕まどひぬる我等ごとき、いたづらものといふ心はしばらくも忘れてはならぬ。』

○全く煩惱なき人生が此世で出来るものなれば極樂はいらぬ筈じゃ。

○罪けしてたすけたまはんとも、罪消さずしてたすけたまはんとも、そは如來に任せ奉るの外はない、罪のあるなしの、沙汰をせんよりは、信心をとりたるか、とらざるかを沙汰せよとの仰をいたゞかねばならぬ。

○いかに煩惱はありとも、信ばかりは遠慮なくいたゞかして貰ふのじゃ、否煩惱はありともては御慈悲の頂が様が軽い、煩惱のものなればこそ、信の外はないのである、ツイ前に申した和讃に『五濁惡世のわれらこそ、金剛の信心ばかりにて、ながく生死をすてはてて、自然の淨土にいたるなれ。』右へも左へも動けぬ御教化じゃ。

○次の和讃もありがたい、『金剛堅固の信心の、さだまるるときをまちえてぞ、彌陀の心光照護して、ながく生死をへだてける。』親様が我等が氣が附くのを待つて、くださるのである。

○いつの間にか夕立の雲が夕陽に破られたやうなものである、雨後の青山のやうに一層はれ〜と御慈悲が嬉しくいたゞける。

○必至無上淨信曉。三有生死之雲晴。清淨無碍光耀朗。一如法界真身顯。いかにも、何とも言へぬ日本晴の空である。

○しかし其様なことは暫時である、はや他の空に雲があらはれてくる、我等はとかく晴れたがつて困る、晴雨を論ぜず照して下さる日輪が難有い。

○不斷煩惱得涅槃ときながら、斷煩惱得涅槃の氣になつて苦んで居る、衆生貧願煩惱中を忘れて能生清淨願往生心だけを欲しがる。

○淤泥華とあるからは泥の中から開くのが當りまいである、高原の陸地に蓮華を生じたいと云ふ者が抑、間違つて居る。

○人生の意義といふ様なことでも、一點の穢れなき清淨無垢の人生を實現することを理想とするもの故、百年立つても出来るものてなす。

○出来ぬものを出来さうとするが迷じゃ、出来ぬものは出来ぬと知れたが御慈悲じゃ。

○かく言へばとて煩惱をよいとは言はぬが、其よくない煩惱

○しかるによく求道の人は、御慈悲が来て下さるのを待つて居る心持じゃ、大間違じゃ、親様を待たせておきながら自分待つて居る心持がそも〜間違である。

○『唯恨むらば衆生疑ふまじきことを疑ふことを、淨土對面して相忤はず、彌陀の攝と不攝とを論ずることなかれ、唯專心にして廻すると廻せざるとにあり、助けて下さるてあろうか、下さるまいか、助かつたのであろうか、まだたすからぬてあろうか、其様なことは一切如來にまかせて、十劫已來御待ち下さつた御恩を知らずにわた心を廻へして、御慈悲を頂くの外はない。』

○『一向專修の人においては廻心といふことたゞ一たびあるべし、其廻心とは、ひごろ本願他力眞宗を知らざるひと彌陀の智慧をたまはりて、ひごろのころにては往生かなふべからずとおもひて、もとのころをひきかへて本願をたのみまゐらするをこそ廻心とは申し候へ。』

○『待ちかねてうらむとつげよみな人に、いつをいつとていそがざるらん。』

○親心には一時も休みがない『觀音勢至もろともに、慈光世界を照耀し、有縁を度してしばらくも、休息あることなかり

○正月の三日に小兒が急病にかゝりましたが、御慈悲によりてすぐ本復さして頂きました、却てよくなつてから筆がとれないで非常に遅れて申譯が御坐りませぬ、皆様かどの様に待て下さりましたでしょう、南無阿彌陀佛。

一、越前の三國桶屋曰く。私はどう思ふてみましても喜ばれぬ時が御座りますが、この時には如何心得ましたらば宜敷く御座りまするやうと。

講師曰く。どう思ふても喜ばれぬ時があらば、その時は吾方に仕方はない、念佛を申すことなり、念佛を申すのがすぐに喜びなりと。

亦曰く。併し喜べぬ／＼と云ふて居るのは、往生を志れてゐるのではないかのう。

一、阿闍世王は未代逆惡の相なれば、凡夫の總名代なり。

一、宗祖大師が『廣木』に『華嚴』『涅槃』の兩經を引用し給ふは、一代經を悉く淨土真宗にとりこみて、『華嚴經』も『涅槃經』も、皆彌陀の本願念佛を説きすゝむる經となさるなり。

一、牛は水呑みて乳とし、蛇は水呑みて毒とす。聖教は水の如し。同じ聖教でも伺ひ様によりては、乳とも毒ともなる心得うべきなり。

《香月院語錄》

就け、偕て我が身の上に振反り見るに、私自身が此の學舎を始めて既に七年になります。其間種々の御縁で段々喜ばせて貰うた事がありますが、偕て本年に於ては如何に御慈悲を頂き、如何に味はせて貰ふのであるか。といふに今の聖人の御苦勞を考へると、何年経ちても變はり有らうとは思へぬ。唯いつ迄も／＼此のお恵み一つを喜ばせて貰ふ事が難有いと思ひます。夫に就きても互に佛敎に御縁が有つて、此の廣大な御恩を知らせて頂いた事を深く喜ばねばならぬと思ひます。

其處で今日の題の『三寶紹隆』であります、之は何うかといふに、只今講話を初める時に歸敬の言葉として「自から佛に歸依し、法に歸依し、僧に歸依し奉る」といふ歸三寶の文を拜稱しました。此の佛法僧の三寶であります。此の三寶を有難く頂き、此の三寶をうけ紹ぎ、之を隆んにする、といふが『三寶紹隆』の意味であります。本來之れは佛敎の精神でありまして、釋尊一代の敎化も畢竟此の三寶紹隆に過ぎぬのである。又日本に於て聖德太子が佛敎をお弘め下された精神も、所謂「篤く三寶を敬せよ、三寶とは佛法僧なり、則ち四生の終歸、萬國の極宗なり云云」(十七憲法第二章)である。又淨土門といふと、親鸞聖人が切にお喜びなされた天親曇鸞二菩薩の御敎化にしても、十方一切の世界、有佛無佛の處に阿彌陀如來は手を廻はして、佛法僧の功德大海を住持し莊嚴して下さるとお示し下されてある。又善導大師の『觀經疏』の初には、有りとおある十方法界の三寶に歸命して、阿彌陀佛の本願を知らせるとお説き下されてある。又親鸞聖人の

講話

三寶紹隆

《求道學舎日曜講話》

近角常觀

上

今日の講話題は『三寶紹隆』であります。昨年一年間在京する限りは日曜毎に話させて頂き、茲に一年の終になつて深く如來の恩徳を感謝し、又今迄一方ならぬ護持養育を蒙つて今日に至つた廣大のお恵みを喜ぶ外は有りませぬ。猶ほ本年にも同様大悲の恵みを喜ばせて頂き度く思ひ、新しき年の來るを待ち受けた事でありませぬ。段々佛の御恩の深き事を思はせて貰ふにつけ、如何にも廣大の御力が我々一人々々の上に付き添うて下され、一人々々を育て上げて下さる事を、彌々難有く感ずる次第であります。

先日來度々申した事でありませぬが、年を迎へるにつき私自身所の感申しますると、親鸞聖人が五ヶ年間流罪の御苦勞をなされて、夫が終れば次には廿年といふ長日月の東國御傳道がある。夫が濟むと又今度は京都に於て卅年間といふものは何處とも知れぬ詫び住居の中に恵みを喜んで、遂にお隠れなされたのである。親鸞聖人の此の御一代の御苦勞を思ふに

上ていふと、聖人一代の敎は阿彌陀佛の本願を説くより外は無。其の本願を説く事が即ち佛敎全體の根本義、三寶歸命の眞意を示す事になるのであります。と申した丈では解らぬかも知れぬが、佛法僧の三寶に歸するといふも、詮じ詰めれば大慈大悲の阿彌陀佛一佛に歸する一つになる。其の阿彌陀佛に歸するは、其佛の廣大の恵みが、我々如き罪惡の衆生を恵まん、昔より我々を呼びかけ、待ち受けて下さる。人生頼むべきは唯此の如來あるばかり、此の如來の御まこと心の塊が南無阿彌陀佛である。我々は此の廣大なる南無阿彌陀佛のお恵みに氣が就けば「煩惱具足の凡夫火宅無常の世界は、よろづのこと皆以てそらごと、たはごと、まことあることなきに、唯念佛のみぞまことにておはします」と頂き、「たゞ念佛して彌陀に助けられ参らすべしと、よき人の仰せをかふむりて信ずる外に別の仔細なきなり」と喜ばせて貰ふばかりである。偕て斯く頂く如來の大悲、南無阿彌陀佛の一つとは、之を逆上りて頂けば、實に是れ三朝淨土の大師の本意、釋尊出世の本懐、聖德太子の御眞意、三世十方一切諸佛の本意、三寶の歸命の精神に従ふ事になるのであります。

曇鸞大師の御言葉に親鸞聖人は和讃に宣はく、
十方三世の無量慧、
ななじく一如に乗じてぞ、
二智圓滿道平等、
攝化隨緣不思議なり。

彌陀の淨土に歸しぬれば、
すなはち諸佛に歸するなり、

一心をもちて一佛を

ほむるは無碍人をほむるなり。

之は『行卷』にお引きなされた『華嚴經』の文に、

文殊の法は常に爾かなり。法王は唯一法なり。一切無碍人は一道より生死を出たまへり。一切諸佛身は唯是れ一法身なり。一心一智慧なり。力無畏も亦然なり。

といふ文がある。此の文より來た和讃であります。即ち十方三世の諸佛の本意、廣大なる三寶の恵みの窮極は、阿彌陀佛一佛に歸し、一心を以て一佛をほめ奉るより外は無いのである。我々が南無阿彌陀佛々々と喜ぶは、即ち此の三寶の慈悲を頂く所以なのであります。て親鸞聖人は眞實の如來の慈悲を知らぬ者、眞實本願の味はひを頂かぬ者の事をば、三寶の恵みの分らぬ者と仰せられた。例へて言ふと、眞實の如來の恵みを知らずして、此世の天神地祇を拜したり、日月星辰を祀つたり、其他の有らぬ余道に心を寄する者は、恵みの頂けぬ外道である、三寶に歸命せぬ者であると仰せられてある。又設ひ佛敎を喜んで居ても眞の恵みを頂かぬ者は、即ち三寶を頂かぬ者であるから、未來化土に生れて三寶を見聞する事が出來ぬとも仰せられてある。之に反して眞にお慈悲を喜ぶ者は、未來極樂に生れ、七寶樹木の葉搖れの音にも八功德水の水の音にも、念佛念法念僧の聲を聞く。空吹く風の音樂にも三寶の聲が聞えると申す事である。斯く頂いて見ると、信仰としての要點は、實にこの三寶の恵みである。而も此の三寶は別々で無く、南無阿彌陀佛の一つであります。我々は何よりも此の廣大なるお恵みに遇はせて貰うた事が有

難い。殊にこの一年を終り、新らしき年を迎えるに際して、彌々有難く喜ばせて貰ふ事でありませう。

蓮如上人『御一代問書』の中に、大勢の人々が歳末の御禮の爲に上人の御前へ伺候せられた。其時上人の仰に「無益の歳末の禮かな、歳末の禮には信心をとりて禮にせよ」と仰せられたとある。又明應二年正月一日勸修寺村の道徳といふ人が上人の御前へ参りたるに、上人は早速「道徳はいくつにならぬぞ、道徳念佛まふさるべし云々」と仰せられたとあります。元日早々「念佛申さるべし」と言ひ、「歳末の禮には信心をとりて禮にせよ」と仰せられたは、三寶の御恩に遇ひ、信心に御縁が有つたからには、其の骨目たる念佛を喜べよと仰せられたのである。我々としては設ひ暮れてあらうが、正月であらうが、此の恵みを喜ぶより外は無い。此の恵みを喜ぶのは、是れ即ち三寶の御恩を頂くのである。而して我々が斯く頂く事の出来るのも外では無い。此世に三寶のお恵みがあればこそ、此の廣大の恵みを、而も私一人々々の爲めと頂く事が出來たのである。我々が此の廣大の恵みに遇はせて頂いた事は、實に至幸中の至幸である。我々は此の御恩を深く喜ばねばならぬ事と思ひます。

偕て以上で大体はお話出來たと思ひますが、今少し細かく申し度い。釋尊御一代の御敎化が結局三寶歸命に歸するといふ事は今更ら言ふ迄も無い事でありませうが、釋尊の御一生は、實に此世に於て三寶の慈悲、も一つ言へば佛陀の大悲を自ら實驗し、自身の身を以て弟子にも之を敎へ、此世に廣大なる慈悲の光を知らせて下されたのである。釋尊が此の世に來り給

ひし本懷は、一に此の三寶の慈悲を知らせて下さる外に無つたのである。又度々繰反しにありますが、此の釋尊の種々にお説き下された三寶を日本に於て初めてお傳へ下されたのが聖德太子であります。聖德太子の事は近頃世間一体に段々喜び出したやうで、之は誠に慶ばしい事でありませうが、其の聖德太子の有難い御敎示は即ち拾七憲法の第貳章である。

篤く三寶を敬せよ。三寶とは佛法僧なり。則ち四生の終歸萬國の極宗なり。何の世、何の人か是の法に嚮はざらん。人尤惡なるは鮮し。能く教ふれば乃ち化す。其れ三寶に歸せずんば何を以てか狂れるを直さん。

斯の如くあつて、三寶は實に四生の終歸、萬國の極宗である。人生此の三寶を頂くより外事は無い。此の三寶は生さとし生ける者の據り所。有りともある國々の據り所。何の世何人と雖も此の恵みを受けぬ者は一人も無いのである。斯く言ふと佛敎の無き西洋は何うかと思ふ人が有るかも知れぬが、夫は信仰上より見ぬ人間立場の話である。信仰上より言ふ時は、佛敎の有ると無いとに係はらず、必ず恵みは到る所に行き届いて下さる。而已ならず何者と雖も此のお恵みの頂けぬ者は一人も無いのである。若し此の三寶の恵みが無つたなら「何を以てか狂れるを直さん」て、世は眞に闇に終はるのであります。猶ほ此の外聖德太子の上には到る處に三寶といふ言葉がある。聖德太子一代の經營は寧ろ此の三寶紹隆を外にして、一事も無いのであります。殊に彼の聖德太子『四節之文』と傳へるものには、度々三寶紹隆といふ言葉が繰反されてあつて、此世は三寶がもとである、願はくば三寶を紹隆して久し

く國家を保ち、率土安穩庶民快樂ならしめんとといふ意味の文字が度々出て居るのであります。

以上は釋尊一代の敎説、如何にも甚深微妙の敎法ではあり、廣大無邊の佛境界ではあり、又種々の修行や戒行や、又弟子達の行法等無量であるが、要するに三寶の外は無い、此の三寶の慈悲を知らせて下されたのが釋尊の御一生で、又之を我國民に知らせて下さるのが聖德太子の御意であつた事を申したのであります。其處で我々が釋尊の御敎えを頂くにしても、細かく言ふと切りが無いが、肝心の此の廣大なる三寶の慈悲を見ぞごなうと、佛敎で無くなつて仕舞ふ。如何に澤山の御經を讀んでも、此の根本の三寶の恵みを讀み違へると、駄目になつ仕舞ふのである。又聖德太子が日本に於て大乘を起し、文明を起し、美はしき日本の國家を御經營下された太子が御一代の御恩徳を思はせて貰ふにしても、其の肝心の太子が生命となされた三寶を見のがすと、太子が一代も死んで仕舞ふのである。太子の御一代は唯此の三寶あるが爲に、顯はれ來つたのである。

毎々申す事でありませうが、『勝鬘經』の中に三寶章といふのがあつて、三寶に歸依するといふも、究極は佛に歸依するのである、如來に歸依するのである。法に歸依して喜びを生じ、僧に歸依して和合を得るが、此の二歸依は未だ究竟の歸依で無い。結局は此の二歸依は佛に歸依する一つである、如來が根本であると説かれてある。其文は斯うであります。

常住の歸依とは謂はく、如來の應等正覺なり。法とは即ち是れ一乘の道を説くなり。僧とは是れ三乘衆なり。此の二

歸依は究竟の歸依に非ず。少分の歸依と名く。何を以ての故に。一乗道の法のみ能く究竟法身を得と説て、上に於て更に一乗の法を説く事無し。三乗の衆とは恐怖あり、如來に歸依して出んことを求め、阿耨多羅三藐三菩提に向ふ。是の故に二依は究竟の依に非ず、是れ有限の依なり。若し衆生有つて如來に調伏せられて如來に歸依し、法の津澤を得て信樂の心を生じ、法僧に歸依す。是の二歸依は此の二歸依に非ず、是れ如來に歸依するなり。第一義に歸依するは是れ如來に歸依するなり。云云。

偕て度々言ひますが、聖徳太子の此の御本意が、親鸞聖人になつて彌々著しくなつたのであります。親鸞聖人は『行巻』に於て、同じ處の『勝鬘經』の文を代りて、一乘といふは、即ち誓願一佛乘である、南無阿彌陀佛の恵みを頂く一つであるといふ事を懇々と言つてお出になる。即ち親鸞聖人は上來申す所の聖徳太子の三寶興隆の御本意は、阿彌陀佛の誓願一佛乘にある、南無阿彌陀佛の恵み一つを興へる事であると教へ下されたのである。夫であるから聖人は『教行信證』に於て、直ぐ此の裏をお示し下されて、唯此の念佛ばかりである、其他は皆な間違ひであるぞとお知らせ下されてある。即ち『化身土巻』の下の初に先づ、

夫れ諸の修多羅に據つて眞偽を勘決して外教邪偽の異執を教誡せば

と言つて、次に

其處で話が大方細かくなりますが、我々が此の如來の御恩を頂く事の出来るには、又甚深の因縁がある。即ち佛がもとゞ我々に此のお慈悲を知らせんがために、種々に御苦勞下されてあるのである。我々は之を喜ばせて頂く事が肝心であります。就きて親鸞聖人は『淨土論』及び『論註』の上に示されてある御言葉に喜んでお出になる。今日は之を一つ申上げ度いと思ひます。夫は何うかといふに、此の世に廣大のお恵みが有つて、我々を導き御慈悲の中に引き込んで下さる。其の廣大の御力が常に我々の上に充ちてある。其の有様をお示し下されて『淨土論』の中に、

安樂國清淨にして、常に無垢輪を轉じ、化佛菩薩は日の須彌に住持するが如く、無垢莊嚴の光、一念及び一時に普く諸佛會を照し、諸佛の群生を利益す。天樂華衣妙香等を雨らし、諸佛の功德を供養し讚するに、分別の心有ること無し。何等の世界か佛法功德の寶無からざらん。我願くば皆往生して、佛法を示すこと佛の如くせん。

之は廣大なる佛境界より三寶が有らゆる國々に顯はれ給ひて、我々を導いてお慈悲に引き込んで下さる事をお知らせ下されたのである。「何等の世界か佛法功德寶無からざらん」と、日本と言はず、支那と言はず、西洋の如き佛教の無き所にも、如來の力は常に満ちて居て下さるのである。我々が此の度お慈悲に氣附かせて貰ふ事を得たのも、全く此のお力によるのであります。而して『淨土論』の此のお言葉を曇鸞大師は『論註』に於て更に叮嚀にお示し下された。其處に有難い御文がある。之を一つ皆さんに聞いて頂き度いのであります。曰

般舟三昧經に言はく、優婆夷是の三昧を聞きて學ばんと欲せん者は(乃至)自ら佛に歸命し、法に歸命し、比丘僧に歸命せよ。餘道に事ふることを得ざれ、天を拜することを得ざれ、鬼神を祠ることを得ざれ、吉良日を視ることを得ざれ。

とある。是であります。三寶に歸する者は、天神地祇を祠つたり、鬼神を拜したりしてはならぬ。又世の一切の餘道に事へてはならぬ、眞宗の法は唯此の三寶の慈悲、即ち如來大悲の外は無といふが親鸞聖人の腹であります。親鸞聖人の教化、眞の佛教の極致は何處にあるかと言ふに、此の廣大の佛の御恩を喜ぶと喜ばぬと、恵みの解ると解らぬと、唯此の點に在る、此の一點で佛教と佛教で無きと、眞と非眞とが別れるのである。設ひ口に念佛しても、眞に此のお恵みの解らぬ者は、未だ三寶の慈悲即ち佛の大悲の頂けぬ者である。夫では眞の淨土には行けぬ。邊地七寶の宮殿と謂つて、淨土は淨土でも三寶を見聞する事の出来ぬ淨土に行くのである。此の左右の別れ来るはじめの一點、佛の大悲、如來の御まことを頂く事が肝心であります。此の御まことを頂いた者は、即ち先きにも申した如く、極樂に往生して見る物聞く物悉く三寶ならざるは無い。八功德水の水の音も、七寶樹林の風の音も、悉く念佛念法念僧の聲である。設へ此の世に在る間と雖も、廣大なる南無阿彌陀佛の恵みの中に養はれ、三寶の御恩の中に日暮しさせて頂く事が出来るのである。

一には一佛土に於て身動搖せずして、十方に遍し、種々に應化して實の如く修行して常に佛事を作す。偈に安樂國は清淨にして、常に無垢輪を轉ず。化佛菩薩は日の須彌に住持するが如きの故にと言まへり。諸の衆生の淤泥華を開くが故にと言まへり。八地已上の菩薩は常に三昧に在て、三昧力を以て身本處を動せず、而して能く遍く十方に至つて諸佛を供養し、衆生を教化す。無垢輪は佛地の功德なり。佛地の功德は習氣煩惱の垢ましまさず。佛諸菩薩の爲に常に此の法輪を轉ず。諸大菩薩亦能く此の法輪を以て一切を開導して、暫時も休息すること無けむ。故に常轉と言ふ。法身は日の如くして、應化身の光、諸の世界に遍するなり。日と言ふは未だ以つて不動を明すに足らざれば、復、如須彌住持と言ふなり。淤泥華とは經に言はく、高原の陸地に蓮華を生せず、卑濕淤泥に乃し蓮華を生ず。此は凡夫煩惱泥の中に在て、菩薩の爲に開導せられて、能く佛の正覺の華を生ずるに喩ふ。諒に夫れ三寶を紹隆して、常に絶へざらしむ。二には彼の應化身、一切の時、前ならず、後ならず、一心一念に大光明を放つて悉く能く遍く十方世界に至つて衆生を教化す。種々に方便し修行所作して、一切衆生の苦を滅除するが故に。偈に無垢莊嚴光、一念及び一時に普く諸佛會を照して、諸の群生を利益する故にと言へり。上に不動にして至ると言へり。或は至るに前後有るべし。是の故に復、一念及一時無前後と言へるなり。三には彼れ一切の世界に於て、餘りなく諸の佛會を照す。大衆餘りな

く廣大無量にして、諸佛如來切徳を供養し恭敬し讚歎す。偈に天樂華衣妙香等を雨して諸佛功徳を供養し讚するに、分別の心有ること無きが故にと言へり。無餘とは遍く一切世界一切諸佛の大會に至つて、一世界一佛會として至ること有ること無きことを明す。(中略)四には彼れ十方一切の世界三寶ましまさぬ處に於て、佛法僧寶功徳大海を住持莊嚴して、遍く示して如實の修行を解らしむ。偈に何等の世界か、佛法功徳寶無らざらん。我れ願くば往生して佛法を示すと佛の如くせんとたまへるが故にと言まへり。上の三句は遍く至ると言ふと雖も、皆是れ有佛の國土なり、若し此の句無んば便ち是れ法身所として法ならざること有らん。上善所として善ならざること有らん。觀行體相竟りぬ。云々。

隨分長い御文であります、如何にも有難いお示である。佛は安樂國土より我々の爲に普く十方世界に力を顯はして我々に此のお慈悲を氣附けて下さる。前ならず、後ならず、一念一時に諸方に顯はれて、餘す處無く行き渡つて下さる。設ひ三寶の無い處にも常に顯はれて居て、計らざる所に喜びを與へて下さる。而も此の廣大のお恵みは、我々一人々に残らずお慈悲を知らせんとのお恵みである。故に我々は我れ計はらざるに、此の三寶に催うされて逐はる慈悲を頂くを得るのである。我々が此のお恵みに開導せられて貧煩煩惱の胸中に正覺の華を生じ、一念有難いと頂く有様は、實に是れ卑濕淤泥の地に蓮華を生ずるものである。殊に此の中に「三寶を紹隆して常に絶へざらしむ」といふ言葉がある。今日の題は實

界である。善きが善きにて當てにならず、悪しきが悪しきにて當てにもならず、斯れが斯う、彼れが彼れといふ事は、此世に於ては決して言ふ事が出来ぬのである。之は我々が過ぎ去りし跡を振り反ると誰ても解る事である。

普通世間では年始年末になると、過ぎ來し跡を省みて感慨を催うすのであるが、佛教を頂いて見ると此の點に於て余程味はひが變はて來るやうに思ひます。世間の感慨は過去一年を省みて、思ふた事が出来無つたと悲むのであるが、信仰上より考へれば、夫處でなく何年経つても變はらぬものは自身自身の罪惡である。一年の跡、一代の跡を回想すると、三百六十五日罪の無い日は一日も無い。一年間爲す事、する事、悉く三毒煩惱の塊である。振り反れば振り反る程、彌々自分の煩惱の涯し無き事と、生死無常の激しき事を知るのみである。我が身として此丈善くなつた杯と言へる事は一も無いのであります。私自身にしてからが慈悲に氣が附きて既に十年になります、此の通りである。設ひ此の後三十年経たうが、五拾年経たうが、乃至息の有る限りは、矢張り變はらぬ淺間しき凡愚底下の惡業生である事を氣附かせて貰ふばかりである。之が人間の本性であります。されば此の罪惡の身を以て、如何に修養し工夫した處が、無い處から光が出る筈も無し。炭はいつ迄も炭、泥はいつ迄も泥なのである。茲は能く頂かねばならぬと思ひます。

他力本願を輕々に聞き過し、罪は有つても助けて下さると、唯ずらりと考へて居つては、間違ひます。我々は今申すが如く、我身として善き事は一つも無い者である。而も其の淺間

は此から來たのであります。即ち今日我々が斯くの如く佛法を頂く事が出来るといふものは、此の冥々の三寶紹隆の御恩によるのである。先程より言ふ釋尊一代の御說法、聖徳太子の經營、三朝淨土の大師達の教化も、我々より頂く時は、之れ皆な此の廣大のお恵みから顯はれ給ひた我々一人々々の爲めの御苦勞に外ならぬのである。して見れば我々としては、唯此の廣大のお恵み一つを頂くより餘事は無いのである。

全体我々は宿縁あつて斯くの如く佛教に遇はせて貰ひ、私は斯く講話を致し、皆さんは之を喜んで下さる。斯くの如く有難き日暮しをさせて頂いて居る事でありますが、偕て私初め自身を省みるに、長い間に何程か善くなり、何程か修養が出来て居るか。初めにも申した如く、私が學舎を開きて既に七年、其間常に皆さんと斯くお話致し、又數多い方が喜んで下さる。がさて其の長い間に私自身が何れ丈善くなりて居るかと言ふに、善くなりたと言へる點は一點も無い。今も是れ昔の儘の煩惱の塊、罪惡の結晶である。長い間であるから何處か少しは善くなつたと言へ相な筈であるが、何れ丈許してもさうは言ふ事が出来ぬ。之がお互の有様であります。之を考へると、我々是如何に煩惱を斷せんとするも、如何に修養せんとするも、石は何時迄も石、炭はいつ迄も炭である。我々はいつ迄経つても之迄より善くなつたとは決して言ふ事が出来ぬのである。人生上にしてからが、我々は常に斯くすると善くなる、斯くすると悪しくなると頻に氣を配つて居る事であるが、其の世の中が思ひ通りになるかといふに、思ひ通になる事は一も無い。矢張り是れいつ迄経つても火宅無常の世

しき、力なき、光なき身を以て、何か一つ角の力があり、光がありさうに考へて居る無慚無愧の者である。氣が附いて見ると一として明る味の無い暗黒の塊である。其の淺間しき我々が、此世に於て初めて三寶の慈悲に遇はせて貰うた。猶ほ解かり能く言ふと、佛法僧の三寶の根源たる阿彌陀佛の本願の恵みが、我々の上に差し向ひて居て下された。世の中に此の一つが居て下されたればこそ、我々罪惡の衆生が安神させて貰へるのである。頂き處は茲であります。三寶といふと何かばつとして廣い事のやうに聞えるが、併し漫然と頂いて居てはならぬ。三寶は即ち阿彌陀佛の本願である。阿彌陀佛の本願は、世に何一つ仕て見やうの無き我々の爲に、御成就下されたのである。我々が此の仕方無き者なるが故に、顯はれ給ひたのである。罪業深重の惡人、火宅無常の世の中なる故、其者を哀れみて廣大の大悲心から差し向け給ひし如來の御まこと心である。世に唯此の一つがある。或々を哀れみ給ふ慈悲としては、世に此の一つあるばかり、我々は之を頂かねばならぬのであります。大聖釋尊が一代三寶をお説き下され、『般舟三昧經』に、餘道に事ふることを得ざれ、天を拜する事を得ざれ、鬼神を祠る事を得ざれと、際立て、お示し下されたは、此の肝心の恵み一つといふ事を知らせんが爲である。又聖徳太子が篤く三寶を敬せよ、三寶は四生の終歸萬國の極宗なり、夫れ三寶に歸せずんば、何を以てか狂れるを直さんと仰せられたは、如何に騒ぐも此のお恵みが無かつたら世は闇みなるぞ、我々は唯此のお光り、お恵みがあるばかりで助かるのであるとお教へ下されたのである。又親鸞聖人が一

代本願々々と仰せられたは、惡人正機の本願であるから、惡人が當り前て助かると言はれたのでは無い。十方世界の生死罪濁の衆生、泥中に呻吟せる人間、煩惱の火炎に燃ゆる我々、當てにならぬ世の中なる故、佛は廣大の親心から、此の者此の世に向つて助けにや措かぬとある廣大の大悲心であるぞ。此者を助けるには戒行でもいかぬ、修行でもいかぬ。であるから阿彌陀如來は南無阿彌陀佛といふ本願を建て、此の本願の一つで助けて下さるのであるぞと、無限大悲の南無阿彌陀佛の親心一つをお示し下されたのである。和讃に宣はく

彌陀成佛のこのかたは、いまに十劫をへたまへり、
法身の光輪きはもなく、世の盲冥をてらすなり。

年は去り年は来る。斯く日は矢の如く去るが、彌陀成佛のこのかたは、今に十劫をへたまへり。阿彌陀佛の大親は十劫以來我々を待ち受けて居て下されて、法身の光輪きはなきは、世の盲冥を照らさんが爲である。茲に此の佛が居て下さる。人間如何に苦みても自分から一寸の光も出るものには無い。光は此の光あるばかりである。又

無明の大夜をあはれみて、法身の光輪きはもなく、
無碍光佛としめしてぞ、安養海に影現する。

此の無明の人生を哀れみて廣大なる法身の境界より無碍光佛と顯はれ給ひ、南無阿彌陀佛の本願を以て我々を照らして下さるのが阿彌陀佛である。

茲になると世の中に恵みは、唯此のお恵み一つであります。此の如來の恵みの光明は、世のあかるみを照らし給ふのでは無い、無明の大夜を照し下さる光明である。如來ならては仕

ある。斯く夜の月や、又自分の四圍の物があかるいとて、其物自身があかるいと思ふたら大變な間違ひである。世の中は暗いものばかり、一日とて世に光明は無けれども、有り難い哉、茲に日輪のお照しが居て下さる。其の如く我々には真底より氷や石や炭の塊の無明闇黒の者なれども、廣大なる佛日が照して下さればこそ、斯くあかるく世の中に日暮しさせて頂く事が出来るのであります。世の中に此の廣大の佛日に遇はせて貰うた事が何より有難い。如來大悲のお恵みが、常に我々を照らして下さるとは何たる幸福であらうか。三寶紹隆といふ此の廣大のお光一つの事である。此のお光が居て下さればこそ、卑濕淤泥の心中にも無垢清淨の蓮華が開けて下さるのである。高原の陸地には蓮華を生ぜず、卑濕淤泥に即ち蓮華を生ず。て、高い所に蓮華は生ぜぬ、穢き淤泥の中に蓮華は開く。自分に光やあかるみが有つて、善事や修行が出来ると思つて居たら大間違ひ。我々は淤泥や濁水や石や砂の塊、其の穢き者なればこそ、此の有難き恵みを頂く事を得るのである。煩惱の泥水なればこそ、正覺の華は宿つて下さるのである。煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界、心中を叩けば何處に一點のあかるみも無く、何年経つても善くなる例の無い互が、此の當てにならぬ世の中に於て、唯三寶のお恵み一つで此の廣大なるお光を頂く事が出来るとは、實に有難き極はみであります。而して此のお光は一點氣が附くと、一時に皆な行渡つて下さるのである。一枚の戸隙子をほげせば隅から隅迄明るくなる如く、一點お慈悲に氣が附けば、有りと有るもの残らず佛のお恵みてあつた事が解らせて貰へるのである。佛

方の無き我々を照らし給ふのである。此のお恵みの外に、猶ほ何か間に合ふ物の有るやうに思ふて居る間は、此のお恵みの有難味は解らぬ。我々現に一年一代の跡を考へると、初より終迄は何處に一點之といふべき光明は無いでないが、全く是れ闇の人生である。而るに其の當てにならぬ闇の人生を、我々は猶ほ當てにして居る。此の有様を見るに見兼ねて照し込んで下されたのが、佛の光明であります。先程申した「淨土論」の御文に、「安樂國清淨にして常に無垢輪を轉じ、化佛菩薩は日の須彌に住持するが如く、無垢莊嚴の光、一念及び一時に普く諸の佛會を照して、諸の群生を利益す」とあるは、此の光明の至り込んで下さる有様をお知らせされたのである。佛の無垢莊嚴のお光りが我々を哀れんで下さる有様は、猶ほ日輪の須彌に住持するが如くだとも示し下されたのであります。

私は思ひまするに、我々は日輪の光の中に居て、世の中は斯くあかるい處だと思つて居る。あかるいのは決して茲に在る書物やテーブルがあかるいので無い。書物やテーブルは唯是れ暗黒の物質に過ぎ無いが、一度日輪東天に昇れば、世の中は一面のあかるみに見えるのである。あかるきは世の中があかるきに非ず。日輪があかるいのである。夜になれば太空中に月が顯はれて日輪と違はぬと言ふけれども、其月自身に光があるか。能く調べれば其月は是れ、冷かなる石や氷や噴火口の塊である。月に光は無けれども、廣大の日輪の光が反射すればこそ、斯く美しくしき月が現はれるのである。光ありと言ふも其物自身に光があるては無く、日輪が有ればこそ

の廣大のお恵みは昔より此の私一人に此のお慈悲を知らせよとの御苦勞であつたかと氣が附くと、釋尊一代の御說法始め聖德太子親鸞聖人の御苦勞、三朝淨土の各高僧方の御化益も、皆な是れ盡く方法性眞如報化等の諸佛が我々に此のお恵みを知らさうとの骨折りがあつた事が解らせて貰へる。斯く頂いて見ると、此世は是れ三寶の溢れ給へる世の中である。三寶の充ち満ち給へる世の中である。我々は夫れと知らずして、而も此の廣大のお恵みに護持養育せられ、遂に今日之に氣附かして貰ふに至つた者である。斯く氣が附くと、我々が此の佛法僧の三寶、即ち南無阿彌陀佛のお恵みに預る喜びは、何とも言ふに言へぬのであります。

我々は此の世で何を頼みにするか。此の廣大の恵みを頼みにするより外に無いのである。南無阿彌陀佛の外に人生頼みにすべきは一も無い。其の唯一の南無阿彌陀佛を頂いて見れば、世の中は何から何迄皆お恵みである。日輪の世界を照らすに至らぬ里の無き如く、佛の無垢清淨のお光は一念及一時に、何處からても我々を照して下さる。而して此のお光の至る所有らゆる物を皆淨化し莊嚴して下さるのである。正月になると町は皆松飾を施して面目が一新する。此の無垢莊嚴の清きお光で飾られると、人生は凡て皆美しく面目が一變するのであります。國家と雖も社會と雖も家庭と雖も、此の清淨光で莊嚴せられると、方角が一變する。春になれば梅香ひ鳥鳴く如く、此のお光を蒙ると、此の人生に春風駘蕩の春景色が現はれる。今迄は冬枯れの墓ない淋しい氷や雪の人生であつたのが、此のお光りて照らされると、人生新たなる喜びを發生

する。和讃に、
慈光はるかにかむらしめ、ひかりのいたるところには、
法喜とうとぞのべたまふ、大安慰を歸命せよ。
加來の慈光に照らされると、此の冬枯れの淋しき人生、たよ
り無き人生が、美はしき賑ぎやかな人生に一變するのであり
ます。又和讃に

超世の悲願さしより、われらは生死の凡夫かは、
有漏の穢身はかはらねど、こゝろは淨土にすみあそぶ。

我々は生命の有る限り罪惡の人間、此の世は飽く迄も無常の
世の中である。其の當てにならぬ生死有漏の人生なれども、
茲に超世の悲願が居て下さる。此の廣大の恵みを頂いて見れ
ば、我等は最早や生死の凡夫では無い。此の身は矢張り昔の
穢身ながら、心中に光が充ちて下され、此世ながら心は淨土
に遊ばせて貰へるのである。斯く喜ばせて頂く時は、如何に
多くのみ佛がお喜び下さる事か。

觀音勢至もろともに、慈光世界を照耀し、
有縁を度してしばらくも、休息あることなかりけり。
無數無量のみ佛は常に我々一人々々を照し護つて下さるので
ある。

安樂淨土にいたるひと、五濁惡世にかへりては、
釋迦牟尼佛のごとくにて、利益衆生はきはもなし。

之は一度此の恵みに遇ひて、廣大なる如來の境界に行かれた
人は、又此世に出現して衆生を利益して下さる事を示し下
されたのであります。

我々は人生を悲しい處と言つて居る。悲しいのが奪る人生

此の世で廣大なる佛の恵みを頂けば、我計はずして自然に
極樂淨土に往生させて下さる。極樂淨土に往生すれば、自然
に念佛念法念僧の心を生じ、七寶樹木を見るにも念佛、念法
念僧、八功德池を見るにも念佛念法念僧、念佛念法念僧なら
ざる時處は一も無い。極樂は三寶づくめの處であります。

段々斯く頂いて来ると、實に極りなき三寶の御恩でありま
す。三寶の御恩と言ふも、くどいやうであるが、如來の御ま
こと心の南無阿彌陀佛を頂く一つである。年を迎へ年を送る
にも、此の三寶紹隆の御恩、即ち南無阿彌陀佛を喜ばせて貰
ふより外は無い。若し此の恵みましまさずば我々は一日たり
とも心安く穩かには暮せぬのである。此の恵みあればこそ我
々は斯く無事に一年を迎へさせて頂けたのである。私が七年
間皆さんと話する事の出來たも此の御恩であります。私は
又今年一年間皆様と共に此悠久極り無き恵みを喜ばせて頂き
度いと思ひます。聖人のお言葉に、

我歳はままりて安養淨土に還歸すといへども、和歌の浦の
片雄浪のよせかけ、歸らん同じ、一人居て喜ばし二人
ともふべし。二人寄て喜ばし三人と思ふべし。その一人
は親鸞なり。

我なくと法は盡きまじ和歌の浦、
あをくさ人のあらんかぎりは。

苟も世に人間の存する限り、此の廣大の恵みはいつ迄も遣
つて下さる。今後末になればなる程彌々三寶紹隆し給ふ事と
思ひます。日本の上にしても聖徳太子の三寶紹隆の思召が、

の真相であります。悲しい人生は當てにならぬ、其の當てに
ならぬ人生を當てにして居るのが我々の間違ひである。而も
其の當てにならぬ人生が、此の恵みに氣が附くと、到る處光
明の人生、恵みの人生である。何處を押へても盡十方無碍の
光明ならざる所は無ないのであります。茲になると年始も年末
も無い。設ひ二年三年喜んだとて、此の罪惡の自分がえらく
なれるものでもなく、設ひ八十年九十年喜んだとて飽き足
りのあるお慈悲でも無い。又「朝に道を聞いて夕に死すとも
可なり」て、長い間喜ばして貰ふも可いが、氣附かして頂い
た上は今死んでも可いのである。唯々此の人世に於て、此
の三寶の恵みに遇はせて貰ふた事を喜ぶばかりであります。

さて斯く氣が附いて見れば、此世からお慈悲の中に住はせ
て頂いて居るのである。生命終れば無論極樂無爲涅槃界に生
れさせて頂くのであります。親鸞聖人は「眞佛土」卷に此の極
樂の有様を明示し下されて、

謹んで眞佛土を按ずれば、佛は則ち是れ不可思議光如來な
り。土は亦是れ無量光明土なり。

と仰せられた。是れ八功德水の水の音も、七寶樹林の花房も、
悉く念佛念法念僧の聲であるといふ何とも言ふに言へぬ境界
である。又和讃に、

寶林寶樹微妙音、自然清和の伎樂にて、
哀婉雅亮すぐれたり、清淨樂を歸命せよ。
三塗苦難ながくとち、但有自然快樂音

このゆへ安樂となづけたり、無極尊を歸命せよ。

後になる程彌々現はれて、互は此の難有き御教を聞く至
幸を得たのである。之に就けても今日迄の廣大なる御手引き
を彌々喜ばせて貰はねばならぬ事であります。和讃に、

聖徳皇のあはれみて、佛智不思議の誓願に、
すゝめいれしめたまひてぞ、住正定聚の身となれる。

他力の信をえんひとは、佛恩報せんためにとて、
如來二種の廻向を、十方にひとしくひろむべし。
佛慧功德をほめしめて、十方の有縁にさかしめん、
信心すてにえんひとは、つねに佛恩報ずべし。

此の廣大の恵みは、之を人に言ふなどあつても言はずには
居られぬ。十方ありとある有縁の方々之を聞かせ度い。南
無阿彌陀佛々々と聲の限りに言ひ廻はり度い事でありま
す。皆さんも御存知の如く佛教の上に四恩といふ事がある。
此の四恩といふも外では無い。此の三寶恩の事である。即ち
阿彌陀佛の御恩の事であります。

今、一年の始めに際し、過古一年を省みると我が身として
は悉く之れ懺悔の種であります。唯此の廣大の恵みましま
せばこそと喜ばせて頂く外は有りませぬ。罪惡深重の我々、
火宅無常の世の中なれども、既に此の廣大なる如來の恵み
まします以上、何かは憂へ何かは歎かん。設ひ千山萬岳前に崩
るゝとも、此の如來の智慧力、光明力、大悲力に導かれて、必
ず行くべき處に行かせて下さる事と信じます。斯くお慈悲を
頂くと、世間は改曆ぢや新年ぢやと騒いで居る事であるが、
我々に於ては年を迎えるも南無阿彌陀佛、年を送るも南無阿
彌陀佛である。蓮如上人は壘を叩いても南無阿彌陀佛、衣の

襟を叩いても南無阿彌陀佛と喜びあらせられたと申しま
す。(終)

告白

佛の強縁

長尾加壽子

私は近來求道學舎に御法聽聞の御縁を戴て居る者で御座り
ますが、此度先生の仰に従ひまして、信仰の告白をさして戴
ます。丁度今より五年以前、彌陀佛の強縁に催されて、大悲
の慈光を味はせて戴きました。實に難有事で御座ります。私
は性來至極強情な邪見な者で、人に愛されませんでした。十
三歳の時華族女學校が設立されました。懇に道德
の御教を受けまして大に前非を悔ひ、内心大に改りましたが、
自性ゆゑに直にそれを行に表す事が出来ませんでした。従て
餘り人と言葉を交す事を好みませんが、以後は人道の外に道が
あるとは思ひませず、只々正直でさへあれば宜き事と思ひま
して、萬事露骨に且つ極端で有りました。又所持品は多きを望
みませず、親友も何時も一人しか持ませんでしたから、人か
ら變人よと申されて居りました。かくて五年の後當家へ縁付ま
して、以後何の障りもなく過して居ます。今より五年前明治
卅八年の夏の初ころ、姫路に住んで居りました時、日露戰役に
て夫從軍の不在中、婦人會員と致しまして停車場に軍隊送迎の
時、いつも御一處になりました或る令夫人から、或日休息の
暇に小冊子を御貸被下しました。戴て見ましたら佛法の事が書

行 誠 上 人

猿 猴 提 月 《涅槃經》

かけぞとも思ひしらする溪河の月とりくくによよふ世のなか

十界の中佛界

しるやいかに夜はすがらによよふ三世の佛の御名は我名なりとは

生死涅槃猶如昨夢 《圓覺經》

何ことも昨日のゆめときくならなほなほさめかぬわが心かな

盲龜值浮木 《涅槃經》

めしひたる龜も浮木にあふものをいつまで沈む我身なるらむ

生死甚難厭 《支談分》

木米にも心とまらぬもち葉をいとひかれたる人に見せばや

山茨念故沈生死 《心地觀經》

あともなき風にあらそふ心よりまよひの波やたちさわぐらん

極樂無爲涅槃界

ちらの里かげかたぶかぬ山のほに月と花とをまかせたらなん

て有りました。常時私は佛法は異國の教で無用の者と思ふて居
りましたから、ざつと拜見して直に御返し申しました。それ
から其方が種々な佛書を御貸被下、又大そう御多忙の中から
度々御尋被下て、御法を御勸めになります。當時私の心持は
性質疑ひ深う御座りますので、容易に人を信じませず、又世
の凡ては當にならぬ者で、自分を欺かぬ者は自分ばかりとい
ふ考て有りました。しかし夫人が御親切を以て御貸被下す御
本を見ずに御返し申様の事は致しませんでした。御面會の度
重りまして私が信じられぬ由を彼是と申上りましたら、あなた
は實に石の様な心故、私が申上ても無駄ですから、あなたに
適當の御僧(軍隊布教師)が有りますから、どうか其方から聞
て被下との事でした。そこで私の思ひますには、それは御僧
なれば自分の宗教を弘むるため都合の事を申されるに相違
ないが、人はいざ知らず、此の私の心が奪はれるものかと、
面白くもあり且夫人の御親切に酬る考から承知の由を申上ま
した。日ならず御面會を得まして以來、月々貳回づ、御話被
下る事に定りましたが、前申上りました様の心持でしたから、何
でも御僧に勝ち度いので穴を拾ふ様の考から、一生懸命に聽
聞しては邪見な御尋を致し、何時も柔順には伺ひませんでし
た。第四回目に御名號の事を伺ひました時はこう思ひました。
それは今迄南無阿彌陀佛は御佛を拜する時の言葉と思つて居
りましたから、御佛前にては南無阿彌陀佛と申し、手を合せて
居りましたが、南無は歸命と伺つて見れば、誓の言葉で御座り
ます。此上は誤て御佛前に稱名いたしたなれば、否でも佛教
に従はねばならぬ、悲しき事と思ひました。其内彼の夫人か

ら御貸被下ました和譯元人論と云ふ書物を拜見いたしました
て、三世の因果を信じました。それ迄は死ねばそれで終りと
考て居たので有ります。五回目の御講話を戴きまして、間もな
く、其御僧が御歸國になりましたが、御別れ申上る時、私の様な
者は伺ひましても無駄で御座りましようと思上りましたら、否
御慈悲なればそんな事は有りませぬ、しかし二三年は掛りま
しようから、まあ、氣長に御聽聞をなされませと申されま
した。そこで私の思ひますには、馬鹿々々し兩三年も此様
な事して居られる者ではなし、是は一つ聞くだけ聞いてどち
らとも方を付て仕舞ましよう、かくて間もなく後任者が御
出になり、御申次によつて引續き御話をして被下しました。又
近處の御説教所に月六才夜分御講話が有ります。其處へも聽聞
に參つて居りました。或日御僧の御宅に伺ひました時、求道を
御出しになりました、是は文學士近角常觀と申される人の發
行されし佛教雜誌ですが、御覽なされとの事です。私は聞耳
立てまして、文學士ですか？扱ても御僧ならぬしかも文學士
が御信じになるとは不思議の事と思ひ、拜借して歸り拜見致
しました。實に初より終りまで涙で有りました。如何な御記
事を拜見してどう感じたものやら、今では一向覺えがありま
せんが、我身の罪惡にてあてにならぬ事も感じたので有ります。
それから伺ひぶりも變て參り、又夫の凱旋も何時か知れませ
んの、兵站部に從軍して居ましたので、凱旋後は何地へ參
りますやらしれず、若し伺ふ御人もなき處へ參つたならば一
大事と存じ、一増聽聞に身が入りました事御座ります。丁
度卅八年の十一月廿五六日と覺えますが、今申上りました御説

教所に報恩講が勤りまして參詣致しました。其時の御説教に
てこうした御慈悲で御座りましたかと、實に難有く、且つ今
迄疑ふどころか、誇つて居ました事がもつたいなく、又實に
邪見極りなき此身を親なればこそ育て、被下た難有事であ
る。又此様な不實な者をよく今まで妻として被下た事と慚愧
に堪えませんでした。私は父に死別の時も人に涙を見せませ
ぬ位でしたのに、思はず知らず泣けたので有ます。實に當座
は只難有く自分ながら根氣に驚くほど御稱名いたしました。
暫く致しまして扱て、どうして私が佛様に歸依するやうに
なりましたか、理窟も疑も何處に行たかしらん、尤て私がな
くなつた様であると、不思議でなりませんでしたが、それか
らして御佛の御導と伺ひまして、何とも申しやうなき難有さ。
誠に私の様な求法心のなきものが、御名號を戴くとは、御宿
善あればこそと實に難有き次第で御座ります。

一、蓮如上人仰られ候。何たる事かきこしめしても、御心にはゆめ
つ不叶なり。一人なりとも人の信をとりたることなきしめし
たさと、御ひとりごに仰られ候。御一生は人に信をとらせたく
思召し候山、仰られ候。云云。
一、善知識の仰成とも、成まじきなんと思ふは、大なるあさましきこ
となり。なにたる事なりとも、仰ならばなるべし存すべし。此
凡夫の身が佛にならうへば、さてなるまじきと存することあるべ
きか。然れば蓮宗近江の湖を一人してうめよと仰候とも、畏りた
ると申べく候。仰にて候はばならぬことあるべきかと破申候。
一、蓮如上人御病中の時仰られ候。御自身何事も思召のことなきこと
となし。思召ことならぬことなきなり。それにつきて御往生
あるとも御身は思召のことなきことなき。但御兄弟の中、そのは
か誰にも信のなきかなしく思召候。世間にはよみぢのさばり
ふことあり、我に在りては往生すとも、それなし、たゞ信のな
き事、之を歎き思召候由仰られ候。《蓮如上人御一代明書》

きけ、此身は何の聖なるものにもあらず、天人の生れにもあ
らず、金や寶石や、黄なる檀香にも非ず、白き紅き蓮華より
化生せしにも非ず、又聖き花密もて満てるにも非ず、實に穢
物に充てる身なり、總ての悲しみの源も罪のもと病の住家
もみな此身なるとしりぬ、そが終りは遂に死なり、愛する夫
よ、かゝる身を装ひたりとて何の所詮かある、恰も墓石を色
どるに似たらずや。」と

若人これをきいて、「汝さほどに罪深く穢れたりと思はゞな
どて尼たらざりし」といひければ、妻こそといひぬ。若し君
だにゆるしたまはゞ我は今日出家せん」と。夫は「さらば得度
せしめてん」とて貴き供物をもちて彼女をともしひ。尼寺に行
き、比丘尼の(大衆デバダッタに屬せる)に入れしめぬ。彼女
は此時に早や懐胎なせしかど、己れは些かも之を知らざりき。
彼女は尼となりて月を重ねるうち、他の尼等は彼女の容姿
をみて怪しみて其由を問ひぬ。彼女は我は如何なるかを知ら
ず、とのみ答へたり。尼等は遂に提婆達多の許に彼女を連れ
行きて、曰はく、

「君よ此若き比丘尼は艱難を経て、夫の宥を得、尼たる事を
得たりしが、此頃懐胎せる事明白となれり、得度せし前にか
ゝりしや、又其後にかくなりしや我等は知らず、如何にかすべ
き」と。提婆達多佛陀ならねば忍辱も慈悲も情もなく、冷か
に思へる様、世人もし此事を聞かば、我が徳を傷くる事もあ
るべしとて、直ちに此比丘尼を寺より去らしめん事を命じた
り。恰かも一の石片を投げ捨つると同じく、一言の尋もなく
してかく計らひぬ。

聖傳

デヤータカ釋尊傳

第九 バンヤン鹿

佛一時ジエタバナにおはして、クマーラカツサバと呼べる
長老の母に就きて談りたまひし事あり。
クマーラの母はラージャガハの豪家に生れ、幼より徳高く
して些かもまがれる事なき清き娘なりき。彼女は又佛法に志
厚く、長ずるに及びて、はや阿羅漢果の影は、透明なる器に入
れし燈の如く明かに心中に輝やきければ、遂に發心して尼た
らん事を母に求めたり。

母は彼女に、家の甚く富めると、そが一人娘なるを云ひて
免すべくも見えず、されば、彼女は嫁しての後夫のゆるしを
得て出家せばやと心筋かに時をまちぬ。

かくて彼女は年長せしかば妻として他家の人となり、徳あ
る、著しき婦人として家事を執り、人々に敬はれぬ。
或日此市に一つの祭ありき、町民は悉く宴に集て、市はあ
だかも神々の國の如く麗はしく装はれたり、しかるに、彼女
のみは自ら飾らんとせず、日々の衣を纏ひ居しかば、夫は
汝は何故に美しく装はざるや、と訝みとへり。妻これに答へ
ける様、

「夫よ、身体は三十二の主なるものよりあひてなれるとこそ

比丘尼等命をうけて退きしかど、若き尼は、比丘尼衆にむ
かひて曰く、「貴女等も提婆は佛陀に非らず、我は彼の下に出
家せしに非ず、佛陀に歸依し奉れるものを、提婆の命のま
にかゝるつらき取扱は受けがたし、ねがはくば、我を佛陀な
るジエタバナの世尊のみもとに引き行きて裁をうけしめたま
へ」と乞ひぬ。

されば彼等は彼女を伴ひて、四十五リグの道を通りラ
ージャガハに達し、世尊にまみえて、事の次第を聞え上げぬ。
世尊思ひたまはく、「例へば尼は出家の以前に懐胎せりと
も、口さがなき隠士等は或は瞿曇、提婆に破門されし尼を許
しぬと云はん恐あり、こは王及び大臣等の面前に於てすべ
し」と。

明る日世尊はクマーラ王バセナジ長老アナタビンジカ、勢
力ある弟子ヅサーキヤ女等其他數多名高き人々を召しぬ。是
等の各級の弟子等集まりし時、世尊は長老ウバーリに曰はく、
「行きて寺院の人々の前に於て若き尼を検すべし」と。
長老は集りに行き己の席につき、ヅサーキヤを王の前に呼び
て彼女に次の如く託しぬ。

「ヅサーキヤよ、汝嚴密に彼尼が何月何日に尼となり、又其
前に受胎せしや否やを検せずや」と云ひぬ。
貴女語ひて、直ちに室の二隅に幕を下し、其が影にて若き尼
を検せしに、全く彼女が未だ世俗に在りし時受胎せし事明な
りき。ヅサーキヤ長老に行きて是を告げしかば、長老は集り
に向ひて、尼の無罪なる事を告げぬ。
かくして彼女の無罪は定まりぬ。彼女は恭しく世尊と集り

に對し感謝して退きぬ。他の尼等は又彼女を伴ひて尼院にかへりぬ。

かくて彼女は月満ち精神堅固なる男兒を生みぬ。一日王此尼院を過ぎりしに嬰兒の泣聲聞こえしかば、怪しみて大臣に問ひ給ひしに臣は其理由を聞き是を王に告げ奉りぬ。王これを聞きて、「尼の子を育てん事は、法の生活に妨あるべし、我等彼の保護をなさん」とて宮に連れ行きて王子の如く育てぬ。彼は後にカツサバとよばれ、いと貴き王子として長じぬ。カツサバ七歳になりし時、世尊の弟子となり、漸次成長して、遂に釋尊の弟子中最も辯舌を以て勝れたる者となれり。世尊も常にカツサバ王子は我弟子中最も雄辯なる者なりと褒めたまへり。後彼は遂に阿羅漢果を得、彼母も亦多くの修行を経て涅槃を證しけり。カツサバはかくて世尊の弟子中、中空にかゝれる満月の如く著しき勝れたる者となれり。

一日世尊鉢より歸りたまひて、中食を取り大衆に説法したまひし後室に入りたまひぬ。大衆説教を聞きて後、法の物語せんとて二室に集へり。此時大衆は世尊の徳を稱へんとて、カツサバ王子と彼の母は提婆達多にあやうくも滅ぼされんとせしを、崇高なる佛陀は正義の王なれば、慈悲、忍辱、同情にかくる處なく母子共に救はれぬなど、語りあへり。時に世尊佛陀の端巖なる威容もて室に入り來り給ひ、彼等の語れる事につきて前世の因縁を説き示し給へり。

昔ブラマダツタ、ベナレスを統べたまひし時菩薩は鹿に生れぬ。彼の毛は黄金色にして、眼は寶石の如く輝き、角は白く

鹿は此時大に恐れて、おのゝき死を免れんとて逃げまはりぬ。かくて一兩度打たるゝ時は傷き死するに至れり。

鹿は恐怖のあまり菩薩なる鹿のもとに行き是を語りしに、菩薩はマンキ鹿を呼びて、曰ひけるは、「友よ多くの鹿は失なはれぬ。されば以後たとひ殺さるゝにもせよ、矢もて傷けられん事なくして死せんにはしかじ。我は鹿をして自ら順次に屠場に行かしめん」とす。今日我方の鹿を送らば次に汝の鹿を送れ、番に當りし者は屠場に行き、己の頸を斷頭台に置きて横り、死をまつべし、若しかくなさば鹿のむれは少なくも惱をまぬかれん」と。彼はこれを誦ひしかば、次日より番に當りし鹿は行きて斷頭臺に頸を置きて横り料理人は是を運び去るを常とせり。

されど一日子を孕める女鹿の番は來りぬ。彼女はマンキ鹿の方なりしかば、マンキ鹿に行きて曰はく、「若し我子を生まば、母子共順にしたがひて死せん、されば今は死を宥したまへ」と。

マンキ鹿はこれを免さず、「汝はよく汝の番なるを知れるに、なごかゝる不服を云ふや我は免す能はずとく去れ」と云ひぬ。

彼女は彼より助を得ざりしかば、菩薩に行きて告げぬ。彼は彼女の言を聞き曰はく「さもあらん、汝は歸れ、我は汝の番をゆるすべし」と、おのれ自身行きて斷頭臺に横はりぬ。料理人は是を見て大に驚き、王に申し、「王亦來りて是を見て、曰はく「鹿の王よ、汝の命は既に免し、何故かく横はるや」と。

して銀とまがひ、口はカマラ華の如く紅く、蹄は漆細工と見るまで光りて堅く、尾は西藏の牛の如く細く、體は恰かも駒の如くなりき。

彼は五百の鹿の王として森に住み、バンヤン鹿と敬はれぬ。其處より程近き處に、又他の鹿群ありて、マンキ鹿と呼べる王に従ひぬ。此王鹿も亦金色なりき。

此時ベナレスの王はいたく獵を好み、食事も肉なくしてなす事なきほどなりければ、常に民に命じて獵せしめたり。かゝりしほどに民はおのれらが日々業務に事かくに至りぬ。

されば民おもへらく、かくては我等おのれの業をも抛ざるべからず、とて遂にかくせばやと案をめぐらしぬ。そは王の後園に鹿の食ふべき草を植え水をしつらひて、鹿を悉く追ひ入れ門を閉ぢ、王の取るにまかすべしといふなり。

彼等はそれこそよけれど、直ちに草を植え水を入れて後、各手に手に棍棒、劔、弓、矢等を持ち森に入りぬ。彼等は包圍して捕ると尤もよからんとて、直徑二リーグ斗りも森を圍み、遂にバンヤン鹿とマンキ鹿の住める處を圍みぬ。而して彼等持ち來りし棍棒等をもて樹木や叢を打ち、地を叩きて、鹿の群を悉く追ひ出し、劔や投鎗や弓もて騒ぎ立て、遂に鹿をば園に入れ、門を閉ぢたり。彼等は直ちに王に行き右の旨を告げて引き歸しぬ。

王大に喜び直ちに園に至り見しに、二匹の金色の鹿あるを見て、彼は此二匹のみ命を許しぬ。これより後は時々王自身弓をひきて鹿を倒し持ちかへり、又折には料理人これを撃ちぬ。

鹿の王答へて曰はく、「子を持てる女鹿、今日我に來りて、おのれの死する番にあたれるを告げしかば、我彼女の哀れなる運命を他に譲るに忍びざれば、我これを受けて、かくは横はるなり大王よ」と。

王これを聞きて大に嘆賞して曰はく「我主たる鹿の王よ、我は嘗て人中に於てすら、かくの如く、忍辱、慈悲、同情の者を見ざりき、我此一事を見て汝を嘉す、而して汝及び彼女の死は共に免すべし」と。

「されど二つの鹿は免さるとも他の鹿は如何にすべき、王よ」

「さらば我は悉く免すべし」

「かくて大王よ、此園中に住はぬ鹿は如何ならんか、」

「彼等亦惱ます事なからん、」

「大王よ鹿はかく恩寵を得たりしも、他の獸は如何ならん」

「彼等亦恐るゝ事なかるべし」

「大王よ、かく獸類は安らかなるとも鳥は如何ならん」

「よし、我彼等にも同じき恵を與ふべし」

「大王よ、鳥は平和を得たれど、水中の魚は如何ならん」

「彼等亦安きを得べし」

かくて鹿の王は王に生けるもの總ての殺生を止めしめ、立ちて曰はく「大王よ、正義の道を歩め、正しきと慈悲を、父母、子、兄弟、市民、國民になせ、汝は例へ身は滅ぶとも樂しき天の國に入りぬべし」と。

彼は如此王に説き終りて又群を從へて森に歸りぬ。女鹿はいと安く、花の蕾の如き子鹿を生みぬ。彼はマンキ鹿の群に入り遊びしが、母は是を見て「我子よ、以後彼の群に行か

ずして、汝はバンヤン鹿の群に入れ、とて歌ひて曰はく、

バンヤン鹿に従ひて、

マンキー鹿と住む勿れ、

マンキー鹿と活きんより

バンヤン鹿と死をぬかへ。

それより後、鹿は其のれの生を保たん爲、人の穀物を食ひ始めしが、人は敢て、是を打たず、如何に、彼等が王に彼等の安全に住むをゆるされしかを知れるを以て、彼等は王宮に行き王に其由を訴へぬ。

王は「我彼鹿を嘉して鹿の王に命を免し、かば、我王國を失ふとも我誓は捨てがたし、行け、我國民に鹿を害するを免す能はず」と。

バンヤン鹿是を聞きて、鹿の群を集へて、「民の穀物を食する勿れ」と命じ、人にも「以後汝の畑を荒さざれば、標として木の葉を畑の周圍に掲げおくべし」といひ送りぬ。

鹿等は畑の目標を見て、一步も踏み入るゝ事なかりき、これ菩薩なる鹿の教なりき。

菩薩ばかりして、長き間鹿を教訓して生を畢りぬ。

王亦鹿の教訓を聞きて、生を經たり。

世尊此の譚を終りて曰はく、今我れ、カッサバ母子を保護せしのみならず、昔の生にも亦かくせりき。彼の女鹿は提婆の尼にして、彼女の子カッサバは彼の子鹿なりき。王はアナタにして、バンヤン鹿は我身是也と。

慶 讚

十七憲法

近角常觀

序 論

聖德皇太子は和國の教主として、我が日本佛教に於ける大聖釋尊の地位に立たせ給ふ聖人である。抑々聖德太子が日本文明の祖先として、偉大なる人格たることは、何人も認むる處であるが、近代に至る迄は世人が宗教に對する了解少くして、殊に偏狹なる思想を以て皇太子を評議したる國學者流の思想の爲めに誤られて、其の偉大なる事を認むる者が少かつた。然るに明治時代の文明勃興するに連れて、自然に太子の眞價が現はれ來り、我が國に於ける絶倫の偉人たることは、何人も疑はざるのみならず、今や世界的偉人として其光明を仰がんとする機運である。去りながら私は今日世人の皇太子を尊崇し奉る立場が、未だ正鵠を得て居らぬと考へるものである。従つて皇太子の眞價を完全に仰ぐ事甚だ遠き事と信ずる。全體世人が皇太子を評價する立場は、其の世界的眼光と

文明的經營の點に存するのである。夫故偉人として皇太子を認むることは出来るが、斯の如き絶大なる偉蹟を持ち來たされた皇太子の宗教的信仰其ものを認められて居らぬ。私をして信する處を披瀝せしむれば、聖德太子は其の御名の如く千古に秀て、東西に超えたる。大聖にして、眞に大聖釋尊に接續すべき教主である。親鸞聖人が和國教主聖德皇と讚歎せられたるは、實に皇太子の眞面目を遺憾無く發揮せられたる稱呼である。此の點に於て私は久しき以前より、大聖釋尊聖德皇太子親鸞聖人の間に一貫せる繼承があるといふ事を確信しつゝある次第である。

大聖釋尊が印度カピラヅツの太子として生れ給ひし如く、聖德太子も亦太子として生れ給ひた。釋尊が印度婆羅門教の間に於て佛教の教主として顯はれ給ひし如く、聖德太子も日本無宗教の間に於て、佛教の教主として顯はれ給ひたのである。されど釋尊と大に其の趣きを異にする處は、釋尊は出家沙門の姿を以て行乞して一代說法し給ひたるが、聖德太子は在家俗人の姿を以て、而も攝政の位にありて三寶を興隆し給ひた點に在る。是れ即ち大乘佛教の眞意を實行せられたるものである。即ち人生其物の上に佛陀の光明を實現する

は、大乘佛教の眞髓なれども、印度支那に於ては教理として成立したが、未だ實行としては人生上に實現して居なかつた。然に聖德太子已後我國に於ては遺憾無く之を實現するやうになつたのである。是れ皇太子の親鸞聖人に對する告命に日域大乘相應地とある所以である。而して皇太子が一代の間生命として尊崇し給ひし大乘佛教の經文は、法華維摩勝鬘の三經である。皇太子は三經の義疏を遺し給ひて、其の造詣實験の深き事は明かなるも、皇太子の味はひ給ひし眞髓を一般の民人が同様に味はひ得る事が困難であつた。そこで皇太子は淨土を願生し、天壽國に往生し給ひしにも係はらず、其後行はれたる大乘佛教は矢張り支那的の觀念の法門印度的の山林の佛教に過ぎ無つた。而して親鸞聖人に至つて淨土易行の誓願一佛乘を開闢して、聖德太子の眞意たる日域大乘相應地の理想を遺憾無く實現致された。加之非僧非俗の愚禿親鸞として、化儀を全く聖德太子の法に則られた。之に於てや聖德太子の大乘佛教の眞精神は、親鸞聖人に依つて、一宗として成立するに至つたのである。此點に於て私は聖德太子の信仰其物を深く敬慕し奉る次第である。かく言へば從來佛教者が皇太子を尊敬し奉る意味と同様に

して、何等の新らしき事もないではないかと云ふに、いかにも從來の考と何等の徑庭もない。併遠慮なく言へば、從來佛教者が果して皇太子の信念を十分に發揮することを待たか。

世間の皇太子の人生方面の經營を仰ぎて、信仰の方面を理解せざるの人は、佛教者が皇太子の唯出世間の方面のみを見て、他の世間的方面を認めぬことを見て、固陋迷信に陥つたかの如く思ふて居る。既に前にも言ふたるが如く、皇太子の世間的方面のみを見て、其出世間方面、即信仰方面を認めずして佛教者を難することは、決して感心の出來ぬことであるが、さりながら從來佛教者が出世間的に皇太子を尊崇して居るものが、果して皇太子の信念を十分に味ふて居つたか、其邊は頗る疑はしい。之を要するに從來皇太子を尊崇するに何れも其一面のみを見て、其全體を見ることが出来ぬのである。世人は其世間的方面を見て其事蹟が其出世間的信仰より來ることを知らず、佛教者は其出世間方面を見て、其信仰は遂に世間的經營を實現したる力たることを知らぬのである。世人が皇太子の經營を見るに世上一般の英雄豪傑を見る様な態度を以てし、其信念を理解せぬことの誤なるは言ふまでもないが、其信念を理解したるが如く考へつゝある佛教者が、皇太子の偉

の『上宮太子實錄』の如きは、如何にも世諦經營の上に於て、幾多の偉蹟を紹介せられたる其功決して少きにあらざるも、其宗教的理解のあまりに少き爲め、信仰的事蹟に關しては全く之を湮滅して得意とするが如きは頗る惜むべき事である。神怪に涉るが如きも、古來教主宗祖の傳に於ける奇蹟と同様に、深く味へば必ず深き意味の存するものである。加之世諦の經營其物も眞諦の精神が分からねば決して分からねぬ。古來皇太子が佛教興隆の爲に、馬子と與みして、守屋を滅したといふ國學者流の非難を避けんが爲に皇太子が之に與からざるかの如き回護の筆致を用ひ、馬子の跋扈に對しても皇太子の微力如何ともすべからずといふ様な辯護がある。是皆信仰即眞諦を理解せざるより來りたるものである。そして信仰を理解したつもの佛教者自身が、古來未だ皇太子の眞意を發揮して居らぬ。彼國學者流の批難の如きは全く信仰が分からねぬより來りたるものである。其批難を解けぬ佛教者も、皇太子の信仰が分らぬ證據である。古來宗祖教主といふ人の事蹟は、必ず其現代に了解せられず、迫害を受けた點がある。是其信念が了解出來ぬからである。隨て其現代のみならず後代に至りても其信仰の了解出來ぬものには、矢張批難の點とし

蹟が信念より出て來ることの説明が十分に出來ぬのは、其信念を理解することが難いと言はなければならぬ。猶適切に言へば、出世間の信念が十分に了解が出來ぬものゆへに、之が世間に實現することが分からねぬのである。もつと極言せば十分眞諦の味が分からねぬゆへに、之が世諦として現はれ來ることが分からねぬ。相對より絶對に達すると云ふが其絶對に入ることが浅い程再び相對人生にあらはるゝことが出來ぬのである。此點に於て佛教者が皇太子を尊崇したるも、其信仰より人生的經營の出でくるを理解すること決して十分とは言へぬ。吾人はかく皇太子の人格及信念に對する世人及佛教者の了解が何れも不十分なることは、結局世諦と眞諦との關係が十分了解されないといふことに原因するといふ事を斷言する。此に於てや此兩者の關係を問題として、皇太子の聖德を讚嘆せんと欲するが、私が皇太子を尊崇して且つ世人に紹介したいと思ふ燒點であります。

抑々世人が皇太子の偉大なる芳蹟を讚嘆するにも拘はらず、其標準を人間的常識世間的律法に取るもの故、若し我常識を以て了解出來ることあれば、一に荒誕無稽の如く考へて之を拒み去りて得々たるが如き感がある。近時久米邦武氏て存してある。佛教を信ぜぬ國學者が皇太子を批難したも無理でない。併し吾人は其誤謬を正すには毫も遠慮には及ばぬ、少しも回護する必要がない。私は斷言する、古來の教主宗祖に對する最も了解の出來ない點、特に迫害批難の存する點が、必ず深き意味の存する點である。

聖德太子の一代の精神は三寶興隆である。皇太子の御心に敵もなければ味方もない。皇太子は守屋を敵ともなさらなければ、馬子を味方とも見なされぬ。畢竟太子の御精神は眞諦の信仰あるのみである。『勝鬘經』に所謂攝受正法が皇太子の一代を始終なされたる眼目である。而して勝鬘夫人の十大受三大願は、實に皇太子の信仰的理想である。さればこそ皇太子は自ら佛子勝鬘と名のらせたまひたのである。而して其十大受の第九に曰く、

世尊我從今日、乃至菩提、若見捕養、衆惡律儀及諸犯戒、終不棄捨、我得力時、於彼彼處、見此衆生、應折伏者、而折伏之、應攝受者、而攝受之、何以故、以折伏攝受之故、令法久住、法久住者、天人充滿、惡道減少、能於如來所轉法輪、而得隨轉、見是利一故、救攝不捨。

此文を拜するときは、皇太子の御精神は儼として吾人の前に見奉ることが出来る。守屋に對して皇太子のとりたまひし態度は、折伏すべきものは折伏すといふことである。馬子に對してとりたまひし態度は、攝受すべきものは攝受すといふのである。守屋を亡されたのも少しも私がない。馬子を生かしておかれしも少しも私でなければ、其勢に壓せられたのでもない。折伏攝受は法をして久しく住せしむるためである。結局如來所轉の法輪を隨轉して救攝するためである。故に滅亡したる守屋の所領は、皆佛法興隆のために充てられて、四天王寺を立て轉法輪所とせられたのである。眞に是れ天人充滿、惡道減少といふべきである。是救攝して捨てざるためである。

しからば馬子を滅されざりしは如何、毫も馬子の非を改めしむるに遠慮したまひたのではない。感化的態度をとられたのである。飽迄攝受せられたのである。其結果遂に禍御一族に及ぶをも意とせられたまはなかつたのである。皇太子は後年攝政の地位に上りたまふたるときは、若し自家の爲ならば少くとも蘇我氏の力を減ずるは利益であつたであらう。されど力を得れば得る程却て之を攝受して感化したまひたのである。義疏に力とは勢力と道力とであると解せられた。皇太子

を了解せぬより來るのである。又其信仰を了解すべき佛教者が、此等の世諦にあらはれたる皇太子の精神を十分發揮出來ぬのも、矢張眞諦即ち世諦なる所以を了解せぬからである。かく從來皇太子を十分に了解出來ぬ原因は世諦眞諦の關係が分からぬからである。而して皇太子は御自身を以て此問題を解釋したまひたるか其御一生である。そこで皇太子の眞面目を慶讃したてまつるにつきて最も適切なる方法は、皇太子の御精神を込めさせられたる十七憲法を中心として、此問題を十分解釋するに在りと考ふる次第であります。是本題を採り來りて以て慶讃を肇めたる次第であります。

劈頭吾人は言を極めて斷定して置かなければならぬことは、十七憲法は世上一般の律法主義の道德教訓若くは法律等と全く性質を異にする點であります。抑々世上一般に行はる倫理、教訓、法律等は、皆律法主義より割り出したるものであります。即信仰の如何と云ふことを後にして、兎にも角にもかく／＼せざるべからずと律法的に強ゆるものであります。如何に理想を高尚にして吾人が自策自勵すると雖、中心悦服して自ら信じて行ふ様にならなければ、皆律法主義となるのである。然るに此十七憲法は、根本的に皇太子の信念即

の勢力と道力とを以て飽まで攝受したまひたのである。皇太子の精神は勝鬘の三大願の第三に、

我於攝受正法捨身命財護持正法、是名第三大願。

とあるを理想とせられたのである。後年蘇我入鹿が山背王及皇太子の御一族を班鳩宮に圍みたる時、戦はずして一族悉く身を以て入鹿に與へられし如きは、即ち身命財を捨て、敵に與へたまひたものである。攝受の極遂に此處に到つたのである。如何なる非戰論も無抵抗主義も此實行には及ばない。かく皇太子の信仰を深く味へは味ふ程、皇太子の御事蹟を了解することが出来る。皇太子が崇峻天皇に向て過去の因縁を説きて嚇怒したまはぬ様に申上げられしも、畢竟信仰を以て其間に處することを御勸め申されたのであつて、最も適切な進言であつた。幸にして若し皇太子の御精神が容れられたならば、彼不祥事はなかつたであらう。是なども過去の因縁を信ぜざるものには、皇太子の御思召を理解することが出来ぬのである。

已上の如く論じ來れば、從來世人が皇太子を鑽仰するものも批難するものも、要するに皇太子の世諦即ち眞諦なること眞諦より割出し來りたる世諦である。故に世諦となりて行爲の票準とはなりたれど、實は其一が皆信仰其物の實現であるのである。抑々十七憲法は當時の朝廷に參内する百官有司に對して、其心得書として渡されたものである。平易に考ふれば、畢竟心得書である。さりながら信仰の立場から見れば、事大小となく同一の所信から割出すことなれば、是即ち國家法律の基礎と見るべく、倫理道德百行の根柢として見るべきものである。而して全体が眞諦其物に外ならぬことを十分に了解して置かなければならぬ。即ち政治、法律、社會等其物の上に直に眞諦の信仰が實現することである。是日域大乘相應地と云ふ大乘の眞面目にして、世諦即眞諦、眞諦即世諦とならねばならぬ點である。是三經の眞精神にして、勝鬘經としては前にも一言せし大受の如きは、即ち信仰其物が人生國家の上に實現せし好摸範であります。又維摩經に於て維摩居士が佛弟子の律法主義を打破りて、不二の法門を説き、遂に維摩の默不二に終つたのである。而して眞諦世諦不二となつた點が其理想である。殊に法華經に於ては法師功德品には、俗間の經書治世の語言、資生の業等を説くも、皆正法に順せんと説きて、治世産業即實相といふが一乘妙法の眞意で

ある。かく皇太子の生命とも稱すべき三經の精神がこゝにある已上は、其精神を十分に傾けさせられたる十七憲法に、世諦其儘眞諦の信仰があらはれてあることを忘れてはならぬ。而して私か今、十七憲法によりて皇太子を慶讃せんとするも、皇太子を理想として我等の信仰其物が、かく世諦の上に實現せねばならぬことを説かんと欲するものである。故に此慶讃は通常世上に試みらる、講義、衍義、解釋等の意味にあらずして、之を題目として信仰と人生問題との關係を明らかにせんと欲するのである。

かく十七憲法か世止律法主義とは全く線を異にして、信仰主義のものたることを斷定したが、其事は各條に十分にあらはれて居るゆへに、一一信仰を以て之を説くつもりである。併全体として此に是非概括して置きたいことがある。夫は何かといふに、十七憲法の各條の順序である。私はあまりに多く諸書を涉獵して、古人の説も参考しないゆへに斷定するとは出来ぬが、未だ其點につきて確説あることを聞かぬ。然るに私は此十七憲法の順序は決して無意味のものではないことを確信する。日本書記曰、

十二年春正月戊戌朔始賜冠位於諸臣、各有差、夏四月丙寅

三條の君則天之臣則地之である。即ち大極兩儀を生じ、渾沌より天地判別したるが如く、絶對の眞諦が人生差別の上にあはられて、此に君則臣則を生じ來つたのである。是即ち仁である。既に君臣上下の差別を生じ來りたる已上は、必ず整然たる秩序がありて、一絲も亂るべからざるものである。是れ禮である。第四條、以禮爲本。第五條、明辨訴訟。第六條、勸善懲惡。第七條、人各有任掌。第八條、早朝晏退。皆秩序である。そこで既に秩序ある已上は、其秩序の如く行ふとが出来る力が信である。第九條、信是義本。第十條、不怒人違。第十一條、賞罰必當。皆信である。既に信ある已上は、必ず義が出て來る。律法主義ならば義を立て、是非かくせねばならぬと信を後にするのである。それでは眞の信ではない。我等は信を先にして、自然に義が出てくるのが信仰主義の順序である。勿論こは全体に涉ることなれども、此點が分かり易き故一言したのである。そこで十二條、勿斂百姓。十三條、同知職掌。十四條、無有嫉妬。十五條、背私向公。是皆義である。十六條、使民以時。第十七條、與衆宜論。是即ち智である。かく論じ來れば五行冠位の順序と、十七憲法とは同一の順序たることは、確定動かすべからざる事と信する。然らば此順

朔戊辰皇太子親發作憲法十七條、一曰以和爲貴云云。これは推古天皇十一年癸亥に十二月に太子始めて五行の位を製したまひた。即ち大德、小德、大仁、小仁、大禮、小禮、大信、小信、大義、小義、大智、小智である。翌十二年甲子春正月に始めて冠位を賜ふ、各差あり。夏四月太子始めての憲法十七條を製したまひて、手から書して之を奏したまひたである。此事實から氣を付けて見るに此五行冠位の順序と、十七憲法の順序とは、確かに思想上の連絡あることを發見した。

先づ氣附きたる點より言へば、憲法第四條に明らかに群卿百僚以禮爲本と、非常に禮に重きを置きて、しかも初めに擧げてある。第九條には最も明らかに、信是義本と、しかも信を先にし、信より義の出づることを教えてある。是に於て禮信義の順序を認めるとが出来る。其前後を見來るに、第一條は以和爲貴、無忤爲宗と、人生問題の歸は平和を以て理想とし極致とすることを掲げ來りて、其根柢を求めて第二條に、篤敬三寶と、信仰を根本とすることを斷定してある。是即ち五行を攝むる徳である。かく見來れば其眞諦たる絶對の信仰より、人生相對差別界に實現し來る第一着が即第

序は何を意味するか。之につきて先づ研究すべきは五行説である。即ち五行に五常を配當し、又之に五色を配當し、而して皇太子は此色を其冠の色に用ゐたまひたのである。即ち圖にて示せば

- 徳……………紫
- 木……………仁……………青(春)
- 火……………禮……………赤(夏)
- 土……………信……………黃(土用)
- 金……………義……………白(秋)
- 水……………智……………黑(冬)

五行説としては相生の順序であらう。即ち木より火を生じ、火より土を生じ、土より金を生じ、金より水を生ずるといふことであらう。而して私が主として大に注意を促す點は、五行説よりも寧ろ之より出て來りたる仁禮信義智の順序である。若し之を普通の仁義禮智の順序とすれば、所謂律法主義の道徳となる。しかるに上に各條に涉り大體略叙したる通り、信仰主義の順序として自然に徳仁禮信義智と順次に生じ來る意味が、憲法の明文夫自身にあらはれてある。殊に最初に徳を掲げて絶對の信仰眞諦第一義を源とし、人生問題の根

本は三寶歸命の信仰にあることを示し、是より世諦の諸徳が人生に信仰的にあらはれ来る次第である。かく云へばとて初の簡條は貴くして、終の簡條を輕しとする譯ではない、信仰の上より来る已上は世諦即眞諦である故に、智でも義でも皆信仰より生じ来りたるものなれば同價値である。例せば渾然たる一の珠の様なものである。色といひ形といひ光といふも、畢竟他を離して其一が成立つことは出来ぬ。何れをとるもいつも渾然たる珠夫自身を離れざるものである。冠位にも大小を分ちたるが如く、憲法にも重大な事から微小の事まで行き涉りてある。さりながら信仰の目より見れば同價値である。獅子兔を搏つに全力を用ゐる如く、我等信仰の上よりは大事小事皆同様である。此に至りて眞諦即ち世諦世諦即ち眞諦たる皇太子の精神は、此憲法の順序夫自身の上に煥として明らかである。かく八面玲瓏たる皇太子の信仰其物を、此の如く具體的に我等に與へたまひし聖訓を、一々慶讚し奉るは、實に千載に一聖に遇ひたてまつりたる光榮身に餘ることでありませ。是全く多生曠劫此世まで、護持養育たへざる宿縁と感泣する所であります。

和國の教主聖德皇、

廣大恩徳謝しがたし、
一心に歸命したてまつり、
奉讚不退ならしめよ。

上宮皇子方便し、
和國の有情をあはれみて、
如來の悲願を弘宣せり、
慶喜奉讚せしむへし。

慈覺法師の云はく、唯安養の淨樂のみ捷眞なり、終す可し。若し四衆有つて、復た速に無明を破し、永く五逆十惡重輕等の罪を滅せんと欲はば、當に此法を終すべし。大小の戒體遠く復た清淨なるを得、念佛三昧を得、菩薩の諸波羅密を成就せんと欲はば、當に此法を學ぶべし。臨終に諸の怖畏を離れ、身心安快にして衆聖現前し授手接引せられんとを得、初て塵勞を離れて便ち不退に至り、長劫を歷すして即ち無生を得んと欲はば、當に此法を學し、古賢の法語に等うすべし。能く從ふこと無んや。

〔顯淨土眞實行文類〕

嘆
咏

夜
の
歌

甲
之

暗き夜に
灯なつかし。
あらしのうちに
無限のなごみ。

吾が身今
見えざる力に
抱かえぬ。
思はずあらむ。

深き思に
心はにぎはし、
思ひのよすがは
おほきみ佛。

眠りてあらむ。
見ず聞かず、
かくて心に
歡喜生れむ。

差別のもろもろ
見る見る消えつ
無碍にみちびく
願ひの力。

春の光の満つる室
色の七色輝けど
調和の静けさ
あゝ此の力。

生るゝ力は
見えざる地ゆ
涌き出づ水の
底ひのひびき。

時報

昨年の恩寵

昨年一歳間に於ける我同朋の恩寵を回顧するに、實に無限の感謝に欠けるはなし。新年早々、中村長谷部兩少尉候補生の切實なる告白を遺して軍艦松島と共に海南空しく去りて杏として返らず。其告白によりて幾多の同朋大悲の恩寵に浴せられたるは多く聞く所なり。而して福間久米吉氏一家の上に蒙られし慈光は、亦全國幾多の道友を方便したまひし大悲の善巧ならざるはなかりき。其他武藤、原、林、立石、有田、後藤諸氏を始めとして、毎月最後の求道會の信仰談話會に於てせられたる懺悔、毎月求道雜誌告白欄に披瀝せられたる實験、一々之を仰ぎ來れば唯これ佛智の不思議を讚嘆し奉るの外なし。而して未だ誌上若くは告白にあらはれざる入信獲信の多きは言ふまでもなく、未だ相面せずして久しく御同朋として共に大悲無倦の慈懷に攝取せられたまひたる善親友の全國に在しますを思へば、感謝の涙禁ぜざるなり。昨年の信仰談話會に出て、名を署したまひし御同朋の名を記して、慈光の照護を仰ぎ奉る。猶平素の求道會に出てたまひて、これに洩れたまひし人々の、益々法縁の熟したまはんことを乞加したてまつる。南無阿彌陀佛

求道學舍信仰談話會出席人名

近角常觀、小田島德藏、譽田豊吉、應谷俊城、中柴宇一、小松逐法、日高清三郎、淨川瀧、宮澤磯吉、松島幹夫、鹿島徹巖、宇佐美英太郎、玉木靜雄、田中智肇、牧田平太郎、杉本哲三、蒲田良三、犬養彰、松岡鏡作、中村淨真、松葉專成、長澤惠海、渡邊圓流、眞田増丸、塚原秀峯、今野勝

治、富岡教雲、平野正二、有田義之介、高田道、吉岡清光、菅野喜久治、吉田三代吉、吉田是照、香春敏夫、吉岡茂、塚原幾子、石田壽太郎、有田喜太郎、酒井ふさ、加藤みつ、安藤祐專、齋藤教慧、佐伯頼治、高村與藏、由雄なを、千鶴子、中村しげ、乗杉敏存、淺見安之、藤井萬喜太、佐崎幸喜、爲貴七覺、葛有賢、井野定次郎、町原虎之介、西本龍山、吉原政道、柄津眞成、小笹熊谷、眞原成覺、興元達禪、於保介藏、田邊治一郎、田中徹、神谷三郎、淺野幸之、栗津祐智、伊藤松治、棚橋幸次、中川挺三、佐藤直丸、酒井宗三郎、松崎覺淳、伊部千代松、和田翠、前田義太郎、今井清子、今井せい、荻野仲三郎、美佐捨次、安村行雲、伊東勝三、若櫻木滋、永孝照、永瀬貞一、菅原廣濟、安部久次、近角さそ、本田美壽、藤野さみる、中村幸子、本谷すむ、西川藤吉、大村曉心、樋口敏彦、石橋勝、神保達見、白松月象、丹野英治、兒玉信義、海東卯之吉、水井文藏、梅原秀、長尾收一、白井三之助、角谷八三郎、村上義一、小澤一、銀田界雄、藤川若松、角眞壽雄、前川勇市、堀勘穂、城榮、田中たつ、若林くま、松崎壽三、光本寛隆、柴田さよ、加藤せい

第二求道會信仰談話會出席人名

近角常觀、田村眞吾、大塚勇次郎、竹中賢惠、中柴宇一、梅野薫、中川挺三、赤瀬保次、河野智嘉太、於保介藏、寺井庄太郎、伊藤惠博、田代金作、奥村父衛門、津田信惠、山岡むめ、關二十郎、森金、白鳥辰、小田島とみ、岡田たけ、小澤一、光井津留、森弘、東種秀、林英三、中里庄五郎、伊藤庚午郎、關谷勝平、西村末吉、西村長次郎、吉阪邦三、北條成椎、太田用一、藤野秀麿、栗田善次郎、畑田千代、富田菊、成田留、田宮宗城、小田島德藏、加藤爲吉、高崎堅三郎、牧田平太郎、富吉豊吉、三部他三郎、吉田隆太郎、中野岩吉、田中忠興、長澤惠海、長野貞一、岡部と

太郎、加藤爲吉、津田野敬一、藤井寛、麻生善平、中川信三、近角常音、日野顯立、八木澤文吾、佐伯正、後藤了海、有田静境、藤野秀麿、河野行信、高崎堅三郎、谷内正順、太澤通明、塚原支、平井仁慈子、菅瀬たけ、伊藤かつ、小島よしの、龜岡小歌、本間ふみ、杉りう、自在丸伊恵子、三田やす、丸茂むね、松下よう、中尾みつ、光井香、塚本次郎、岩室源次郎、住田智見、青木兵二郎、岡田菊徳、長沼賢海、長澤諦道、益田與次郎、森廻人、神谷稔、居本道丸、佐久間孝淳、富吉豊吉、高桑純吉、海野香淨、大森實、戸崎家壽吉、經國菫亮、江部藏圓、關根未什、西脇善調、秋田眞融、眞田一哲、鈴木默重、増田甚次郎、丸茂猛、宇野圓空、小穴宗次、原直次郎、古川静江、兒玉うた、吉田良隆、本村豊助、弘中静枝、成瀬なか、松島浪、梅野薫、中森敬信、笠木輔一、唐崎政成、高橋謙吉、圓淨淳、林英三、本谷暢音、田中文勝、佐藤清一郎、辻村一男、林道倫、井上了惟、光澤顯瑞、小倉蘭教、武田慧宏、橘川光子、濱田龜七、兒玉ませ、小川健之丞、鎌田れつ子、三浦房子、島津みち、脇川操子、姉崎袖、宇野治、田林さだ、佐々木さくの、大佛衛、宇野圓空、伊藤正雄、岡源兵衛、森弘、坂井敬、津田善造、昆一郎、浮川彌太郎、津田常俊、津田藤枝、青樹堯然、服部ひさ、白鳥吟子、須藤五十子、菊池晋二、波岡茂輝、上田定次郎、有野田雄、川村眞治、立石仙六、加藤新吉、佐藤兵太郎、島田廣惠、森揆一、冠松次郎、大地原誠言、本庄良教、湯澤幸吉郎、山内慈、田邊晋八、峰田龜太郎、橋村徳一、田中正直、後藤雄平、佐藤貞吉、永持石之助、川上法勵、一家宗誠、近藤清作、關倉三郎、冠まさ、荻野あい、相島龜三郎、久芳龍藏、後藤たかの、宇野はつ、百目木うた、丸茂文子、岡部君子、寶閣とま、立石なを、柳月晴臣、吉坂邦三、田川茂平治、後藤辨宏、坂谷桂圓、石原眞藏、香川教圓、時友仙治郎、近藤正

め、小澤とも、小澤はる、中村さかよ、長尾かづ、鈴木しづ、蛇田清子

昨年の地方傳道

昨年は地方御同朋の切なる御招きを受けて、到る處無限の法縁を蒙りしこと前年に比類なかりき。しかも殊に遠隔にして從來御縁を結ばざりし各地に新らしき法契を賜はりしこと何たる喜むや。今や默坐冥想一年間の行程を顧るに到る處の山川と、喜び迎えたまひて溢る、ばかりの恵を受けたてまつりし御同朋と、講壇に見えて相共に喜びたてまつりし御同行の面貌にいたるまで、髣髴として眼前にあらはる、心地してえも言ふべからざる感恩の情に堪えず。思ひ出づるまゝに書き列ねて共に慈光の照護を仰がんかな。

一月には多摩川の畔、我が理想郷たる羽村の求道會に入し、ぶりにて御同朋と清き信仰の會を開き、二月には御縁深き安中佛教青年會にて大聖釋尊の涅槃會に遇ひたてまつりて、春猶淺き夕三千年の昔を偲ぶ。三月末より石見傳道の途に上る。眞摯の氣象、跌宕たる風物、一として忘るべからず。三田尻の驛柳を後にして乗合馬車にて行く。津發田の宿を初めとして、横田に、高津に、益田に不可思議なる多生曠劫の宿縁を慶び専光寺の清會忘るべからず。土田の山、三隅の雨、濱田に無限の法縁を感謝し、阜頭に渥き御同朋の送を受けて手を別ちたるは、今猶斷腸の思あり。九州に渡り福岡に釋尊の降誕會を祝して、一昨年の法縁を追懐し、熊本の夜會、待受けたまへる御同行と會し、箱馬車にて獨り阿蘇山下を行く。坂梨の一夜はからざる法縁に遇ひ、豊後竹田に着す。南畫の山水を見るが如し。玉來の法話、岡本の待受、歴々眼に在り。箱馬車一日危峯の杜鵑花見盡して、大分求道會に到り、學舎に在るの思あり。別府の温泉、日出の教育會、高田の雙翼會を経て、封戸の高風温情に浴し、四日市の別院、中津の町、耶馬溪の寺、友枝の山、皆法喜溢れざるなし。松江に到り恍と

して樂土にあるが如し。物皆不思議。添田に、犀川に、行橋に、時短くして法縁深し。大隈町是亦如何なる宿世の因縁ぞや、有田家の佛間いと尊し。小倉の別院、福岡の久保家、大川の青年會、遂に長崎三日求道切實を極む。武雄の懷舊、筑後白木大内家、夜半の家庭法話、嗚呼思ひ出せば如何なる大悲の恩徳ぞや。結縁の御同朋ますく、歡喜の天地に遊び玉へかし。五月末には信州松本の女子求道會の開かれて、新に佛種は播かれ、越後高田上越婦人會にて御縁は温められ、五智に聖人諦居の御苦辛を偲びたてまつれり。六月末には宿縁深き讚岐高松講習會に御同朋の温情に浴し、明石の清風神戸の御同朋、河内極樂寺の縁の鬱蒼たる、磯長廟再度の參籠、江州吉田村の野趣、悉く大悲恩寵の恵ならざるはなし。一先づ歸京、大日本佛教青年會の講習會を終へて、七月末再び出立、横須賀求道會を経て、廣島の講習會に昨年來の法契を深め、奥海田、西條、竹原、に新なる法友を得、播州姫路講習會に多年待受けたまひし御同朋に再び神戶福間邸に孟蘭盆の法話をなす。花巻の舊法縁を温め、初めて北海道の山河に見ゆるを得たり。小樽の天空海淵、札幌の規模井然、岩見澤の四通八達、栗澤の平原一望、旭川の生氣磅礴、函館の人文完備、其氣風と民俗に従ひて佛陀の靈光を仰ぎ、到るところの同朋滿腔の喜を以て迎へたまひしは忘るあたはざる也。青森に、弘前に、藤崎に、能代に、土崎に、秋田に、大曲に、何れも初めて大悲の引導によりて新らしき法縁を契り、新庄、山形の秋色に懷舊の感謝を捧げて、同朋の舊縁を温め、若松求道會に年々歳々の慈恩を仰ぎて、不思議の引接言ふ所を知らず。十一月本山傳燈式に詣て、歸路沼津の御同朋と一晝夜の法喜を得たてまつる。書き去り書き來れば一として御はからひならざるはなし。念佛は義なきを義とし、機なきを機とす。つゝしみて不可稱不可說不可思議の恩徳を感謝し奉る。南無阿彌陀佛。

求道會館設立喜捨金 受領報告 (第卅八回)

- 一金壹圓也 大阪 爲貴 七覺殿
- 一金拾圓也 東京 西川 御兄弟殿
- 一金五圓也 久留米 高崎 信三郎殿
- 一金拾圓也 福岡 大内 つな子殿
- 一金貳圓也 鎌倉 竹内 政子殿
- 一金貳圓也 青梅 小林 さと子殿
- 一金壹圓也 東京 西川 藤吉殿
- 一金參圓也 東京 岡部 民子殿
- 一金壹圓也 横濱 中村 金藏殿

小計金參拾五圓也

通計參千九拾九圓〇四錢也

右御寄附と忝うし難有く奉存
候茲に謹みて奉感謝候也

近角常觀著

人生と信仰

第一章 人生問題と信仰	第二章 悲觀思想と信仰
第三章 倫理力行と信仰	第四章 犯罪心理と信仰
第五章 社會問題と信仰	第六章 國家秩序と信仰
第七章 世界宇宙と信仰	

本書は一昨年雑誌「求道」秋季號として發行したるもの、近時四方同胞諸氏の需要益々急切なる爲め、再び一冊として茲に發刊したるものなり。蓋し現代思想界の亂調は律法的教訓、若くは物質的施設を以て根治する事難かるべし。獨り信仰により根本的に自覺して、初めて解脱せる眞人生に入る事を得ん。是れ本書を發行する所以也。

最新 定價卅錢
郵稅四錢
刊 袖珍美本

發行所

發行所 森江書店
東京 本町一丁目九番
東京 本町一丁目九番
東京 本町一丁目九番

マクス、ミユラー博士原著

佛敎大學教授文學士 清水友次郎先生譯

宗教學綱要

定價 五十五錢
郵稅 八錢

清水學士佛敎大學に教授として宗教學を講ずるや、近代稀有の宗教學者マクス、ミユラー博士の原著を講本とし、隨つて譯し隨つて教ふ。今これを補訂潤飾して以て世に公にす。蓋し邦文の宗教學書としては唯一無二の良書なり。

東洋大學講師 境野黃洋先生著

增補 聖德太子傳

定價 五十五錢
郵稅 八錢

佛敎史家として夙に令名ある境野先生が、其の燃犀なる史眼と圓熟せる文才とを傾倒して日本文明の開拓者、日本佛敎の教主たる聖德太子の事蹟を叙述し、併せし當時社會の政敎習俗の特色を發揮したる名著にして、文章の明快論斷の適確眞に其匹を見ざる所。

發行所 東京小石川原町六丙午出版社 振替一五六一番 鷄聲堂

明治四十二年頭大出版

田淵靜緣師著

●布敎資料全集

版定價 金壹圓

●布敎界空前絶後の新提供

布敎大辭典

製本 全六寸巾四寸五分
半假名振假名付
總布クロリス表金文字入
至洋綴美裝 二千頁内外
定價金五圓

甲 豫約價金貳圓五拾錢 郵稅拾貳錢
乙 豫約價金貳圓八拾錢 郵稅拾貳錢
丙 豫約價金參圓 郵稅拾貳錢

●豫約期限 明治四十二年二月中
●豫約期限 明治四十二年四月中
●豫約期限 明治四十二年六月中

新案此敎大家 田淵靜緣師立案

●期限經過後は定價に復す ●前金に非ざれば豫約と見做さず ●製本四十二年八月月上旬より着金順により送本
●進歩する社會に必辭典ある軍隊に參謀あるが如し故に近來法律に歴專門の辭典あり
●材料豊富なる知識新なる布敎界に其辭典なるべけんや新案布敎大家田淵靜緣師志を此に懐くこと數
●年拮据經營の餘、新古の良材を引き内外の事象を輯め演說說敎等に參考
●もの、悉く網羅せられざるは進歩的布敎家、能く本書を座右に供へば、其知識日々新に
●敎壇に驅逐して百戰百勝さす也

●新進布敎家必携の良顧問

申込所 東京市東區六條二丁目二番八五番 法藏館

法藏館編輯 ●佛敎大家名說全集 壹圓貳拾錢

田淵靜緣師著

●佛敎各宗布敎大資林

再特價 金壹圓 版郵稅 八錢

靈光

△一ヶ月三錢五厘△半年二十錢△一ヶ月三錢△海外一年三十仙(郵税共)
 △切手代用(郵税共)
 △見本は往復はがきにて申込
 △十部以上は部数により割引
 △振替預金にて送金の節は口座料金二錢毎回添へられたし

新年號(二月一日發行)要目

- ◎如何に救ひを喜ぶべきか……………佐々木祐言
- ◎新年の街に立ちて……………増谷 莎水
- ◎年頭の聖訓……………赤松 連城
- ◎四無量心……………南條 文雄
- ◎毎日この言を思へ……………前田 慧雲
- ◎不殺生の話……………釋 雲 照
- ◎繁榮の道……………瑞穂 教群
- ◎己酉元旦歌……………佐々木古眞
- ◎新年の喜び……………近藤 純悟
- ◎家庭に於ける宗教的儀式……………羽溪了諦
- ◎如何にしてこの三ヶ日を過すべきか……………栗岡 水舟
- ◎神戸たより◎其他數十件……………

發行所 神戸市中山手通四丁目 振替口座東京一〇五二〇番 **靈光社**
 京都市御前通油小路 興 教書院
 東京市本郷春木町二丁目 森 江書店
 東京市本郷元富士町二番 盛 春堂

故清澤滿之師序 近角常觀著

訂正 信仰之餘瀝

第 定價卅錢
 拾 部稅四錢
 版 袖珍美本

本書は著者が入信劈頭の著作にして、當時著者が心内に經驗せし煩悶解説、慈愛感謝の信仰を有るが儘に眞摯卒直に告白懺悔したるもの、江湖同朋の愛讀絶ゆることなく、發行以來既に九版を重ね發行部数一萬以上上り、本書を縁として同一信仰に入り給ひし人々の多数なるは洵に感謝に堪へざる所也。而して今回彌々其の第拾版を刊行するに及び、著者は特に本書の完全を期するが爲め、根本より版を改めて誤植訂正は勿論、新に増補する處六篇あり、猶ほ特に爾後の信仰經過を告白して、附録として「予が信仰的實驗」の一篇を加へたり。斯くして本書は面目を一新するに至りぬ。

信仰之餘瀝要畧

定價 五錢
 郵稅 二錢
 (但し四冊迄は郵稅三錢也)

本書は某師の勸誘により、有志諸君が傳道求道の資に供せんが爲に「信仰之餘瀝」中の眼目「宗教的同朋」を「懺悔」「境界に於ける監獄」以下二章を援萃し、傳道用小施本として印刷したるものなり。傳道に志し給ふ諸君の御試用を切望す。

發行所 振替口座東京 一六六九六番 **求道發行所**
 東京市本郷區森川町一番地

近角常觀著

親鸞の信仰

附 眞宗
 錄 教證

定價七十錢 小包料八錢
 クロース綴 美 本

本書は嘗て本誌に連載せる、眞宗慶嘆に大訂正を加へて一書に纏めたるものなり。絶對他方信仰の大權化たる親鸞聖人一代の教證に對し、著者が平生抱懷せる渴仰、尊崇、憧憬の至情は本書に溢れて餘蘊無し。

發行所 東京巢鴨町振替口座東京 二ノ三五三二二番 **無我山房**
取次所 東京本郷區振替口座東京 森川町二一六六九六番 **求道發行所**

規 定

- 一 本誌は毎月一回一日發行とす
- 一 本誌は一切前金にあらざれば御注文に應ぜず
- 一 本誌の代金は可成振替貯金口座にて御送金の事、但し其節には登記料金貳錢必ず御加算を請ふ
- 一 郵便爲替にて御送金の節は爲替振込局は必ず「本郷森川町郵便局」宛の事
- 一 郵券代用の節は五厘切手にて一割増の事
- 一 凡て送金受取人名宛は「東京本郷森川町一番地求道發行所」とせらるべし
- 一 本誌の購讀者は住所姓名を詳細に楷書にて申送らるべく、轉居の節は新舊兩所の宿所を通知する事
- 一 回答を要せらるゝ方は相當の返信料を添ふべき事
- 一 本誌定價左の如し

一 部 一ヶ月 一六ヶ月 一年 郵稅一冊
 金拾錢 一金拾錢 一金六拾錢 一金壹圓拾錢 に付五厘

明治四十一年十二月廿八日印刷
 明治四十二年一月一日發行

發行所 發行兼編輯人 近角常觀
 印刷人 白土幸力
 東京市本郷區森川町一番地
求道發行所 (振替口座東京一六六九六番)
 東京市神田區表神保町 **大賣捌所** 東京 堂

同彼出 趣岸生 苦普入 提遍死 使六隨 司道奉 馬法三 鞍界主 首含紹 止識隆 利得三 佛脫寶 師苦遂 造緣共
 具竟願 乘敬造 斯微釋 福迦皇 信道像 知并俠 現侍及 在安庄 隱嚴
 如願敬 造釋迦 尊像并 俠侍及 在安庄 隱嚴
 即世翬 日妙果 二業以 背世者 往登淨
 土早昇 妙果是 定蒙此 願力轉 病延壽 安
 住世間 若身相 蒙發願 仰依三 寶當造 釋
 懷尺毒 共相發 願仰依 三寶當 造釋
 着於床 時王后 食王后 以仍上 宮法
 皇枕病 弗愈干 食王后 以仍上 宮法
 前枕病 弗愈干 食王后 以仍上 宮法
 法太元 崩明一 年正歲 次辛巳 十二月 鬼
 興元卅 一年歲 次辛巳 十二月 鬼

法隆寺金堂中尊佛光背銘

東瀛第六卷 查版 明治四十年十一月十二日第三種郵便物認可 明治四十二年一月一日發行 (每月一回一日發行)

東京市田區築土代町二二三九號中